



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

令和2年度
公共ホール音楽活性化事業
報告書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、人材育成、情報提供、調査研究、財政支援などの事業を実施しています。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しています。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国6の団体との共催により実施された令和2年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しています。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、この事業を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、令和2年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は令和2年度のものです〉

第1部 令和2年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要	2
登録アーティスト／コーディネーター／実施団体	3
全体研修会中止に伴う対応	5

第2部 令和2年度公共ホール音楽活性化事業 事例紹介・レポート

大空町 (北海道)	8
釜石市 (岩手県)	13
奥州市 (岩手県)	18
長井市 (山形県)	24
長浜市 (滋賀県)	30
府中市 (広島県)	37

第3部 令和2年度公共ホール音楽活性化事業 コーディネーター・アドバイザーレポート

小澤 櫻作 (チーフコーディネーター)	44
丹羽 徹 (コーディネーター)	46
花田 和加子 (コーディネーター)	48
山本 若子 (コーディネーター)	50
赤木 舞 (コーディネーター)	51
仕田 佳経 (コーディネーター)	53
大澤 寅雄 (アドバイザー)	54

第1部

令和2年度公共ホール 音楽活性化事業の概要

令和2年度公共ホール音楽活性化事業 実施概要

1 事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

2 実施内容

- (1) 実施団体 全国6団体（新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、申請14団体のうち、6団体が令和3年度へ延期、2団体が中止）
※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらに関わる指定管理者等は除く。
- (2) 研修事業 ①全体研修会（中止）
令和2年4月20日（月）～22日（水）／（一財）地域創造、ヤマハホール
開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修。
※全体研修会に代わる資料集及び講義動画並びにアーティストプレゼンテーション動画の作製・配布、事前研修（コーディネーターによる実施団体への訪問研修）を実施。
②個別研修の実施
広報を始める前の段階（公演2、3カ月前）に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。
- (3) 公演事業 公演事業の実施（全国6地域） 令和2年11月～令和3年3月
登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。
① コンサート 身近で、親しみのあるクラシック演奏会
② アクティビティ 出前コンサート、レクチャー、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

3 費用負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

- (1) 一般財団法人地域創造が負担する主な経費
①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費
（演奏家の出演料、交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料（演奏家）、演奏家派遣に関するマネジメント料）
②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を負担
- (2) 開催地の地方公共団体が負担する主な経費
演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など）

4 主催・共催等

主 催：開催地の地方公共団体等
共 催：一般財団法人地域創造
制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

令和2年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1 令和2－4年度登録アーティスト

齊藤 一也	(ピアノ)	株式会社東京コンサーツ
石上 真由子	(ヴァイオリン)	株式会社プロ アルテ ムジケ
梅津 碧	(ソプラノ)	株式会社1002
竹多 倫子	(ソプラノ)	株式会社二期会21
新野 将之	(打楽器)	株式会社東京コンサーツ
高橋ドレミ & 實川風	ピアノデュオ (ピアノデュオ)	MIYAZAWA & Co.

2 コーディネーター

小澤 櫻作	(上田市交流文化芸術センター プロデューサー、平塚文化芸術ホール開館準備アドバイザー)
丹羽 徹	(一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事 事務局長)
花田 和加子	(keynote代表、ヴァイオリニスト)
山本 若子	(有限会社N.A.T取締役)
赤木 舞	(昭和音楽大学、武蔵野音楽大学他、講師)
仕田 佳経	(東京藝術大学音楽学部准教授)

3 サブコーディネーター

菊地 俊孝	(公益財団法人東松山文化まちづくり公社副局長、東松山市民文化センター副館長兼プロデューサー)
三浦 幸恵	(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 音楽制作担当)
桜井 しおり	(ワークショップデザイナー、ピアニスト)
酒井 雅代	(東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 助教)
佐野 秀典	(作編曲家、(公財)東京都交響楽団 アシスタント・ライブラリアン ほか)

4 アドバイザー

大澤 寅雄	(株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室)
-------	-----------------------------

5 アシスタント

浅野 洋介	(公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団芸術振興課せんがわ劇場制作係)
-------	--

6 研修スタッフ

神田 和範	(公益財団法人北九州市芸術文化振興財団 音楽事業課)
-------	----------------------------

7 実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	アーティスト	コーディネーター
1	北海道	大空町 (おおぞらちょう)	一般財団法人大空町青少年育成協会	大空町教育文化会館	2020年11月 26日(木) ～11月28日 (土)	新野 将之	小澤 櫻作 浅野 洋介
2	岩手県	釜石市 (かまいしし)	釜石まちづくり株式会社	釜石市民ホールTETTO	2020年12月 3日(木) ～12月5日 (土)	石上 真由子	丹羽 徹 菊地 俊孝
3	岩手県	奥州市 (おうしゅうし)	前沢商工会	前沢ふれあいセンター	2020年11月 19日(木) ～11月21日 (土)	齊藤 一也	仕田 佳経 桜井 しおり
4	山形県	長井市 (ながいし)	長井市	長井市民文化会館	2021年2月 26日(金) ～2月28日 (日)	梅津 碧	花田 和加子 佐野 秀典
5	滋賀県	長浜市 (ながはまし)	株式会社ふるさと夢公社きのもと	木之本スティックホール	2021年3月 11日(木) ～3月13日 (土)	竹多 倫子	赤木 舞 酒井 雅代
6	広島県	府中市 (ふちゅうし)	府中市	府中市文化センター	2020年11月 19日(木) ～11月21日 (土)	石上 真由子	山本 若子 神田 和範

※新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年度におんかつ（導入プログラム）の実施を予定していた市町村のうち、秋田県大館市、秋田県羽後町、福島県会津美里町、埼玉県川越市、和歌山県日高川町、福岡県中間市は、令和3年度へ延期。千葉県木更津市、徳島県美馬市は中止。

令和2年度公共ホール音楽活性化事業 全体研修会中止に伴う対応

1 概要

令和2年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミの内容をまとめた資料集及び講義動画並びに登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーション動画を作製し実施団体へ送付した。また、コーディネーターによる事前研修（実施団体への訪問研修）を実施した。

2 対象者

令和2年度事業実施団体 担当者

3 資料集コンテンツ一覧

1. おんかつMAP
2. おんかつ実施団体一覧
3. コーディネーター等名簿
4. セレノグラフィカ メッセージ&プロフィール
5. おんかつを知る Vol. 1～基礎編～
6. おんかつを知る Vol. 2～実務編～
7. 制作スケジュール
8. おんかつチェックシート
9. おんかつを知る Vol. 3～事例紹介編～①R1年度事例
10. おんかつを知る Vol. 3～事例紹介編～②演奏家事例
11. おんかつを知る Vol. 3～事例紹介編～③事業担当者の役割とは
12. おんかつから始まるホールと地域の未来

4 講義動画

1. おんかつを知る Vol.1～基礎編～
2. おんかつから始まるホールと地域の未来

5 事前研修スケジュール

No	都道府県	市町村	実施団体	実施予定会場	事前研修日程	コーディネーター	備考
1	北海道	大空町 (おおぞらちょう)	一般財団法人大空町青少年育成協会	大空町教育文化会館	6月22日(月)	赤木舞	Web会議
2	岩手県	釜石市 (かまいし)	釜石まちづくり株式会社	釜石市民ホールTETTO	6月30日(火)	小澤櫻作	奥州市(前沢ふれあいセンター)で同時開催
3	岩手県	奥州市 (おうしゅうし)	前沢商工会	前沢ふれあいセンター			
4	秋田県	大館市 (おおだてし)	一般財団法人大館市文教振興事業団 ／大館市教育委員会	ほくしか鹿鳴ホール(大館市民文化会館)	6月26日(金)	山本若子	秋田市(アトリオン)で同時開催
5	秋田県	羽後町 (うごまち)	美里音自主事業実行委員会	羽後町文化交流施設 美里音			
6	山形県	長井市 (ながいし)	長井市	長井市民文化会館	6月23日(火)	丹羽 徹	
7	埼玉県	川越市 (かわごえし)	公益財団法人川越市施設管理公社	川越南文化会館	6月29日(月)	仕田佳経	
8	滋賀県	長浜市 (ながはまし)	株式会社ふるさと夢社きのもと	木之本スティックホール	6月30日(火)	山本若子	
9	和歌山県	日高川町 (ひだかがわちょう)	日高川町	日高川交流センター	6月25日(木)	花田和加子	
10	広島県	府中市 (ふちゅうし)	府中市	府中市文化センター	6月26日(金)	赤木舞	
11	福岡県	中間市 (なかまし)	公益財団法人中間市文化振興財団	なかまハーモニーホール	6月25日(木)	小澤櫻作	

※福島県会津美里町、千葉県木更津市、徳島県美馬市は事前研修前に延期・中止を決定したため、事前研修の実施なし。

第2部
令和2年度公共ホール
音楽活性化事業
事例紹介・レポート

実施団体：一般財団法人 大空町青少年育成協会

実施時期：令和2年11月26日（木）～令和2年11月28日（土）

出演アーティスト：新野将之（パーカッション） 伊藤すみれ（パーカッション）

アクティビティ

タイトル：もしも、パーカッション奏者が東小に来たら！

期 日：令和2年11月26日（木） 10：30～11：15

会 場：東藻琴小学校 体育館

参加者：3年生15名、4年生16名

新型コロナウイルス感染予防対策として、間隔をとった位置での授業が求められることから、音楽室では手狭のため、体育館で実施することとなった。子どもたちの反応は比較的少なく、アーティストからの質問にも決まった数名の子供が回答するという状況であった。3・4年という年またぎで実施したことが一つの要因と考える。アーティストから先生に渡したコンサート招待券の話をした際には参加児童は盛り上がっていたようである。

タイトル：もしも、パーカッション奏者が女小に来たら！（4年1組）

期 日：令和2年11月27日（金） 11：15～12：00

会 場：女満別小学校 音楽室

参加者：4年生22名

音楽室での実施としたが感染症予防対策のため間隔をとって席を配置し、併せて開始前、終了後に窓を開けて換気を行った。児童の反応は大変良く、音楽を聴く姿勢も良好で、演奏時には静かに聞いて、アーティストからの問いかけにははっきりと答えるところが素晴らしいとアーティストからも評価があった。アーティストの問いかけに反応が良かったことは、会場が音楽室で、雑音が無く、アーティストと児童の距離が近かったということが要因の一つでだと考えられる。

タイトル：もしも、パーカッション奏者が女小に来たら！（4年2組）

期 日：令和2年11月27日（金） 13：05～13：50

会 場：女満別小学校 音楽室

参加者：4年生21名

前のアクティビティに引き続き別のクラスを対象に実施。午前中と同様、児童の反応は良かった。特に女子児童が活発で、アーティストの問いかけに多くの反応があった。恥ずかしくて発言できない児童には、共演者の伊藤すみれさんが個別に聞いて後で発表するなど対応していた。児童の反応が良すぎたためにこの時間をオーバーしてしまった。担当の先生の盛り上げ方が良く、ほぼ全員の児童がコンサートに行きたいという反応であった。



タイトル：アウトリーチ事業の体験から行政運営における芸術によるアプローチを考える。→中止

期 日：令和2年11月26日（木） 18：00～18：45

会 場：大空町役場 議事堂文化ホール

参加者：役場職員

小規模自治体のまちづくりの要となる役場職員を対象とし、文化芸術に関心と理解を持って頂き、文化芸術の素晴らしさを町民にも広めて頂くことを目的に開催を予定していた。プログラムでは、地域創造からおんかつの目的や効果の説明、アーティストによる学校アウトリーチの体験を実施して頂き、併せて訪問した学校での子どもたちの様子を話して頂く計画であった。実施の直前に役場職員から新型コロナウイルスの感染者が出たため本アクティビティは中止とした。

コンサート

タイトル：PASSIONATE PERCUSSION ～ Masayuki Nino Unlimitedリサイタル

期 日：令和2年11月28日（土） 18：00～20：00

会 場：大空町教育文化会館 教育ホール

参加者：98名

1部40分、休憩換気20分、2部60分合計約2時間の公演となった。1部は典型的なコンサートスタイルで、様々な打楽器を使用した演奏と、打楽器の紹介を交えたコンサート。2部は音楽を流しながら音に合わせた演奏や、プロジェクターで映した映像に合わせた演奏など独特な内容となった。新型コロナウイルスの影響もあり集客は期待より少なかったものの、観客によるアンケートは総じて評価が高く満足感の高いコンサートとなった。



① 応募の動機・事業のねらい

大空町は、生のクラシック音楽を気軽に聴きに行くことや、楽器を教わること、楽器そのものを見ることすらなかなかできない現状があります。このような環境のなか、おんかつ事業を活用して、子ども達をはじめ地域の人に生のクラシック音楽に触れる機会を創出したいという思いから実施をしました。また、芸術文化が地域にどのような変化を与えるか深化を生むか、おんかつに関わった町民が自身や町の将来を考えてもらう機会としてもらうことを目的に実施しました。

② 企画のポイント

地元ではなかなか聴くことができないパーカッションというジャンルであることと、アーティストのプレゼンを拝見して、クラシック音楽を聴いてもらうコンサートとしてではなく、音と一緒に演奏する姿を見せるというイメージで企画しました。アクティビティは小学校のほかに、町のキーパーソンが集まっている役場職員に対し実施し、芸術文化が地域にどのような変化や効果を与えるものかを考えてもらうきっかけとして企画しました。（結果、新型コロナウイルスの影響により役場アウトリーチは中止した。）

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

コンサートについては、アーティストと本番のイメージを共有するのが難しかった。映像を使ったりと一般的なコンサートとは少し違う演出であったので、現地で打ち合わせしながらの準備となりました。アクティビティについては、小学校は問題なく調整がついたが、新型コロナウイルスの影響で密を避けるために会場が体育館になったり、寒い気温のなか換気を実施したりするなどの対応に苦勞しました。特に、町役場へのアウトリーチが、町職員の新型コロナウイルス感染により直前で中止になったのは残念でした。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コンサートの準備については、予定していた時間をオーバーしたが、アーティストの思いを形にしたというホール職員の気持ちもあり納得のいくまで舞台準備を行いました。

アクティビティについては、密を回避するために、人数が多くても間隔が取れるよう体育館で実施したり、2クラス合同を考えていた小学校では、1クラスずつ分けて実施することとしました。役場へのアウトリーチは直前に中止としたが、芸術文化の効果や、音楽アウトリーチの効果など、事前に職員に周知できていたため、また別の機会に本物の音楽アウトリーチ体験を実施したいと思います。

⑤ 事業を実施しての成果

コロナ禍という難しい時期においても、町民の一部ではあるが本物のクラシック音楽を届けることができたということが一番の成果でした。また、ホール運営の視点で考えると、アーティストとホールが一つのコンサートを創るということは、アーティストの思いや演奏スタイルを担当者が理解し、可能なこと、不可能なことをアーティストにも理解してもらったうえで創り上げるものであり、今回のおんかつを通じて、町民にどのような体験をしてもらいたいかを考え、そのうえで公共ホールの事業の企画はどうしていくべきかを考える機会として良い機会となりました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回のようなパーカッションのコンサートは、オホーツク地域では珍しい演目であり、どのような方法で広報するのが良いのか、どのような層の方に向けた内容とするのかを考えることが重要であると感じました。

おんかつ事業のスケジュール上、年度内にアーティストが決まってから、下見、打ち合わせ、曲目が決定し、どのようなコンサートになるのか順調に進めても10月に入ってから広報になってしまいます。大空町でのイベントの場合、多くの人に見てもらえる時期、交通機関に支障が出ない時期として考えると11月初旬から12月初めになるので、その時期に合わせた広報をしていく必要があります。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

プロのアーティストの演奏を聴いた小学生が、小さな声で「これがプロか・・・」と驚いて口にした言葉が印象的でした。アーティストの演奏を聴いた方からは、本物の音楽に触れられて満足したと同時に、都会ではないが自分の町は「アーティストに会えるまち」と誇らしく感じているという話も聞きました。

都会に比べると大空町は芸術文化に接する機会が大変少なく、若者の中には都会に対してコンプレックスを持つ人もいますが、ホールがより多くの町民に効率よくアートを紹介できれば、故郷の良さを考えてもらう切っ掛けになるのではないかと感じました。

大空町は、オホーツク海に隣接する網走市の南に位置した人口約7,000人の小さな町である。この町は、北海道北部のターミナル空港である女満別空港を持つ女満別町と東藻琴村が2006年に合併したことで誕生し、空港を持つ町ゆえに大空町という名前がつけられた。今回の事業の当初の目的では、上述の合併から15年ほど経過したが、住民の交流が十分には進んでいないことから、旧女満別町と旧東藻琴村のそれぞれの小学校に加え、両町村の高校生が通っている公設塾へのアウトリーチを実施することで、音楽を通じて町民の交流が促進されることが求められていた。また、音楽事業の継続のために役場の職員向けのインリーチも実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、町内の小学校2校でのアウトリーチとコンサートの実施のみとなった。

今回の事業では、打楽器奏者の新野将之氏が指名され、マリンバ奏者の伊藤すみれ氏が共演した。打楽器は、楽器の運搬の問題や、誰もが知っている作品が少ないというデメリットがあるが、事業担当者は、楽器を叩くだけで音楽になるという点に着目し、他の楽器よりもより音楽を身近に感じてもらえるのではないかと期待が今回の演奏者の選定の決め手となった。

町内の2つの小学校で実施されたアウトリーチでは、アフリカの楽器であるジャンベの演奏による登場から始まり、カスタネットやタンバリンといった誰もが一度は触ったことがある楽器の紹介、マリンバデュオで演奏された標題音楽に対する曲名を想像するアクティビティ、コンサートでも演奏されるマリンバ・スピリチュアル(抜粋)の演奏で構成された。どのアウトリーチでも、例えばタンバリンの3つの演奏法(叩く、振る、こする)などに対して、普段自分たちが使用している楽器の新しい演奏法に子どもたちは特に高い関心を示していた。また、標題音楽に対する曲名を想像するアクティビティでは、子供たちのユニークな発想が次々と発表され、音楽を通じて創造性を刺激する「遊び」として大変有意義であった。最後に演奏されたマリンバ・スピリチュアルも、どの回においても演奏者が非常に緊張感の高い演奏を行い、コンサートの興味付けとして十分な役割を果たしていた。終演後は、コーディネーターの提案でコンサートへの招待券が配られ、その券を持って多くの子供たちがコンサートに来場していた。

コンサートでは、前半はアウトリーチベースとしたプログラム、後半は、複数の作品の演奏を一つの「ショー」のように見せる形で構成された。特筆すべきは、後半部分である。この後半部分では、照明効果やプロジェクターの使用などを多用したり、コンテンポラリーダンスの要素などを取り入れたりした舞台芸術のような形をとり、従来のクラシック音楽のコンサートとは一線を画す打楽器ならではの創造性に溢れたコンサートとなった。東京都内でもなかなか見ることが出来ないような革新的な内容であったが、終演後のお客様の表情からは高い満足感が感じられ、改めて音楽の感受性に対する可能性を実感した。

新型コロナウイルス感染症の影響により、非常に難しい事業となってしまったが、演奏者の確かな見識と技術を通じて、小学校でのアウトリーチもコンサートも打楽器の魅力が伝わる非常に価値のある事業であった。特に、有名な作品の演奏がなかったにも関わらず、アウトリーチにおいても、コンサートにおいても町民の方々が最後まで飽きずに集中して楽しまれていたという点が、大空町での音楽事業の可能性を大きく広げたとと言える。また、コンサートでの視覚的な効果の使用などは、従来の形にとらわれない事業の企画運営に生かされることが期待される。今後の大空町の芸術振興のさらなる発展に注目していきたい。

実施団体：釜石市民ホールTETTO〔指定管理者〕釜石まちづくり株式会社

実施時期：令和2年12月3日（木）～令和2年12月5日（土）

出演アーティスト：石上真由子（ヴァイオリン） 城 綾乃（ピアノ）

アクティビティ

※アクティビティ2箇所の中止および代替場所決定の概要

令和2年12月4日（金）平田小学校→中止

11/26（木）新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から受け入れ中止の旨、電話連絡を受けた。

⇒ホール公演のチケットをご購入の鶴住居生活応援センター所長が、石上真由子さんのお母様と面識があり、東日本大震災の際に寄付先のアテンドをされたということもあり、鶴住居生活応援センターが代替場所に決定。

令和2年12月3日（木）栗林小学校→中止

11/27（金）栗林小学校より、平田小学校の動向および新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から当該小学校も受け入れを中止する旨、電話連絡を受けた。

タイトル：石上真由子ヴァイオリン・コンサート～Going My Way in Kamaishihigashi junior high school～

期 日：令和2年12月3日（木） 13：30～14：20

会 場：釜石東中学校 多目的室

参 加 者：2年生 40名

アウトリーチ1日目の会場は、釜石東中学校。会場が階段構造で特殊な為、音響や暖房にやや苦勞した会場でした。消極的な生徒が多かったので、大きな反応はないものの、石上さんの2つの夢を叶えてヴァイオリニストを選んだ生き方、城さんの音楽一筋な生き方に刺激を受けている様子でした。生徒からの感想のお礼として「いつかこの海を越えて」（校歌より思い入れの強い曲）の演奏で締めくくりました。



タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート～Going My Way in Unosumai Community Center～

期 日：令和2年12月4日（金） 10：35～11：25

会 場：鶴住居生活応援センター 多目的室

参 加 者：地域住民 10名

東日本大震災の際に石上さんの寄付金の寄付先をアテンドしてくださった、鶴住居生活応援センター所長に受け入れていただき地域住民向けのアウトリーチを実施。1週間前に小学校中止を受けての会場の為、集客は伸びませんでした。地域住民向けという事で、コンサートを意識して釜石観光や震災の時に京都のホールで「アヴェ・マリア」に祈りを込めて演奏していたお話を交えた演奏会になりました。参加した住民の方からお帰りの際には、「楽しかった」「良かった！」とお声をいただきました。



タイトル：石上真由子ヴァイオリン・コンサート～ Going My Way in Ohdaira junior high school ～

期 日：令和2年12月4日（金） 13：35～14：25

会 場：大平中学校 音楽室

参加者：1年生 33名

釜石大観音と太平洋を見渡せる音楽室でアウトリーチ。ヴァイオリンの弓を開いた時の「おお～！」の声や石上さんのトークへの反応が良く興味津々な様子でした。普段は物静かな生徒が多いので先生も驚いていました。苦手だったことや嫌いな事も挑戦していくと楽しいと思えることもあることを中学生に伝えつつ、魅力的な演奏で惹き付けました。充実したアウトリーチをコンサート前にすることができました。

コンサート

タイトル：石上真由子ヴァイオリン・コンサート Going My Way ～夢と生きていく～

期 日：令和2年12月5日（土） 14：00～15：40

会 場：釜石市民ホールTETTO ホールA

参加者：一般 74名 中学生以下 6名 計80名

コンサートは、クライスラー「愛の挨拶」で開演。曲の思い入れや作曲家の紹介、石上さんの2つの夢を叶えてきた生き方をトークに交えたコンサートになりました。日本人初のクラシック作曲家の幸田延さんの曲からは、夢を切り拓いてきた女性の生きるエネルギーを沢山感じられました。後半はヴァイオリンソロ、バッハの「シャコンヌ」から始まり、プログラム最後の曲ラヴェル「ツイガム」で超絶技巧で聴衆を魅了しました。不安な世の中を吹き飛ばす元気と夢を届けるコンサートでした。



① 応募の動機・事業のねらい

クラシック音楽に興味のない方にもコンサートやアウトリーチを通して、アーティストの魅力を知ってもらうことで、クラシック音楽に触れあう機会の提供と夢と希望を感じ、元気をもらえるコンサートの開催を目的として、新規顧客開拓とともに広報物の新しいデザインへの挑戦も視野に入れて応募いたしました。

② 企画のポイント

普段クラシック音楽に興味のない方にも手に取りやすいようA4二つ折りのチラシを作成、雑誌の様に気軽に目にとまり、興味をそそる様にしました。夢を志すきっかけの提供と考える場所になって欲しいと思い、アーティストを身近に感じ憧れて貰える様、トークの内容を夢の話・元気を感じてもらえる内容にしました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

ホール内の別施設で貸館コンサートがあり、開演時間などの考慮、企画内容の詳細化によるターゲット層の設定など様々あった事、経験不足でのコンサート企画への不安、コロナ禍でアウトリーチ先である小学校の受け入れ中止等、大変と感ずることが多くありました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コンサート開演時間は、ターゲット層が足を運びやすい時間帯に、経験不足は、コーディネーター、アシスタントコーディネーターの方々にお話を聞いたり、ホール職員で経験豊富な事業担当者へ相談しました。小学校のアウトリーチ先の受け入れが中止になったのは1週間前でしたが、アーティストとご縁のある方が受け入れ先を提供してくださいました。コンサートの企画を固める過程では、コーディネーター陣に多く助けていただきました。

⑤ 事業を実施しての成果

コンサート企画内容の目標・目的をしっかりと作り込む事の重要性を学ぶことが出来た事、アーティストのトークと演奏が素晴らしく、お客様への満足度に繋がった点が良かったです。アウトリーチでは、夢の話や学生たちにして欲しいという希望とアーティストである石上さん・城さんとの相性が良く、とても素敵なものになったと思えました。コンセプトとアーティストの相性を考えて企画する事も重要と考えさせられました。コンサートでは、普段より30代～50代の方に多くご来場いただきました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサートの内容や演奏が素晴らしかった分、集客に伸び悩んだことが悔しかったです。地域住民への周知やアーティストの素晴らしさを伝え、より効果的な宣伝を探していく必要があると感じました。コロナ禍の集客方法を探っていくことが今後の課題として挙げられます。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アーティストの人柄に触れることで、アーティストのファンになり、普段耳にすることが少ないジャンルの音楽も聴いてくださるのではないかと思います。地域にはトークを交えたコンサートが好きな方が多いので、アーティストの言葉の力と思い出のある曲を交えたコンサートをこれからも継続しつつ、アーティストのファンへの第一歩となるアウトリーチの継続が大事だと感じました。

岩手県釜石市は、総人口は約33,000人、岩手県南東部に位置するリアス式海岸の美しい街である。明治時代には日本初の官営製鉄所が設置されるなど、日本の近代製鉄発祥の地である。また、東日本大震災では海沿いを中心に被災、震災の記憶を今に残す地でもある。

今回、おんかつの実施団体として手を挙げたのは釜石市民ホール（TETTO）である。このホールは東日本大震災で被災した旧釜石市民文化会館の後継にあたるホールで2018年に設置された新しい施設である。ホールの座席数は838席を有し、ギャラリーやスタジオ、会議室などを併設する。ホールの運営主体は指定管理者として釜石まちづくり株式会社が行い、文化事業も積極的に行っている。

おんかつの担当者は釜石市民ホール西塚さん。西塚さんは、今回のおんかつ事業で「地方都市の学校生活で狭くなりがちな視野を広げる機会としたい」という思いを当初より強く持っていた。そんな西塚さんが選んだアーティストはヴァイオリンの石上真由子さんである。西塚さんは石上さんの音楽だけでなく、キャリアやファッショナブルな側面にも惹かれ、釜石市の子供たちに会う機会を提供したいと考えた。

しかし、コロナ禍での実施で釜石市おんかつも順風満帆とはいかず、アクティビティ先の変更や土壇場での中止など、担当者にとっては大変な事業になったと思う。そんな中でも西塚さんは細かなことに至るまでご対応いただき、本当に大変だったと思われる。当初の予定では小学校2コマ、中学校2コマの予定で進んでいたが、新型コロナの拡大に伴い、小学校から辞退の申し出があり、中学校2コマと鶴住居地区生活応援センターでの一般市民の方向けのアクティビティに変更になり、結果的に3回のアクティビティの実施となった。

中学校のアクティビティでは「スペイン舞曲」から始まり、ヴァイオリンの構造や奏法についての説明。小学生だとちょっと難しい奏法の話なども中学生たちはさすが集中力があり真剣なまなざしで耳を傾けていた。とくに石上さんのキャリアの話では、学生たちは石上さんのこれまでの考え方や今後の進路について、自分たちに重ねて聞いている様だった。石上さんのアクティビティでの学生たちに伝える言葉には説得力があり、音楽とともに石上さんの人間性や音楽家としての「芯」の部分も垣間みられるアクティビティで学生たちにとっても良い経験となったのではないかと思う。このような体験こそがまさにアーティストが学校現場に入る意義の一つなのではないだろうか。

鶴住居地区生活応援センターは各種行政手続きを受け付け、保健、福祉の相談受付を行う公民館機能を有する施設である。この鶴住居地区は津波の影響が大きかった地域であるため*まだ仮設住宅に住居している方々もいる。今回の生活応援センターでのアクティビティでは急遽の実施にもかかわらず地域の人たちにご来場いただき、演奏を聞いていただく機会とした。クライスラー「愛の喜び」、バッハ「アベマリア」やファリャ「スペイン舞曲」など透き通る様なヴァイオリンの音色に来場の皆さんが聴き入っているのがとても印象的であった。

コンサートにはコロナ禍にもかかわらず市民の方々にご来場いただくことができた。こんな時勢でもご来場いただける方々がいるのはその地域でのクラシックファン層が潜在的にいらっしゃるということなのだと思う。石上さんのプログラムは聞き馴染みのある曲から曲の解説を交え、ラフマニノフのヴォカリーズ、ラヴェルのツィガーヌ、クライスラーの美しきロスマリンなどが演奏され、来場者を魅了し

無事終了した。

本年度のおんかつ事業は新型コロナウイルス感染拡大により内容の変更を余儀無くされた。全体研修会中止に伴い、資料の配布と講義動画配信という代替措置が取られ、アーティストプレゼンテーションも動画配信とした。初めておんかつ事業に取り組む担当者にとっては、事前情報や事業内容についての情報が少なく、難しい取り組みになったと思われる。特に公共ホールの役割と担当者の想い、運営主体の考え方を整理していく作業については、主にメールを利用して進めたため、意思疎通に時間がかかったこと、細かなニュアンスが伝わりづらいことなど、コロナ禍初年度としての事業実施については課題も散見された。

大変な時期での釜石市でのおんかつであったものの、西塚さんの地域に石上さんの音楽を届けたいという熱意と細やかな配慮、また、TETTOのスタッフの皆さんのフォローにより無事コンサートまで実施できたことに感謝したい。今回は残念ながら小学校へのアクティビティは叶わなかったが、今後のアウトリーチ事業の中でぜひ実現していただきたい。そして今後も「この人の音楽を地域に届けたい！」という強い思いを持って取り組んでいただきたいと願う。

※事業実施後、令和2年12月中旬に全員退去

実施団体：前沢ふれあいセンター

実施時期：令和2年11月19日（木）～令和2年11月21日（土）

出演アーティスト：齊藤 一也（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：想い描くクラシック

期 日：令和2年11月19日（木） 9：15～10：00

会 場：奥州市立前沢小学校 体育館

参加者：4年4組 32名

最初にベートーヴェン：トルコ行進曲を弾いて、軽く自己紹介。奥州市と出身地の山梨県の自然、フランスとドイツでの生活、サッカー、鬼滅の刃などの話をし、意思の疎通を図る。ショパン：子犬のワルツと猫ふんじゃったをミックスアレンジした演奏は、どのクラスでも好評。誰もが一度はピアノで鳴らしてみる「猫ふんじゃった」とクラシックの定番「子犬のワルツ」を融合させるセンスは俊逸。最後にコンサート招待券プレゼントの話をしたら、子供たちが群がる感じがあったので制した。とりわけ、このクラスの子供たちは元気が良い。

タイトル：想い描くクラシック

期 日：令和2年11月19日（木） 11：10～11：55

会 場：奥州市立前沢小学校 体育館

参加者：4年3組 31名

このクラスの子供たちは、とにかくおとなしく、全体的に反応が薄い子供たちだった。ピアノ内にオルゴールを入れ音響と構造の説明など聞いているうちに目を輝かせている子も多かったが、同じような内容のアクティビティを実施しても、これだけ反応が違うものなのかと感じた。後日、前沢小学校からアクティビティ参加者全員から手紙が届いた。心配は杞憂だった。このクラスの子供たちもそれぞれの熱い気持ちが綴られていた。

タイトル：想い描くクラシック

期 日：令和2年11月20日（金） 9：25～10：10

会 場：奥州市立前沢小学校 体育館

参加者：4年1組 32名

子供たちはアーティストやピアノに近づけないので、超絶技巧を写すための手元カメラからモニターに映した映像を食い入るように見ていた。また、アーティスト自身がフランス、ドイツ生活時に撮影した湖の白鳥など映像をモニターに出し演奏して、曲のイメージを連想させた。特にサン＝サーンス：白鳥は授業で学習したこともあり興味深かったようだ。



タイトル：想い描くクラシック

期 日：令和2年11月20日（金） 11：25～12：10

会 場：奥州市立前沢小学校 体育館

参加者：4年2組 31名

チェレスタとトイピアノの音質を説明してからバレエ映像に合わせピアノの上にトイピアノを乗せ同時に弾いてみせた。華やかで重厚で異国情緒を感じさせた。最後に前沢小学校からアーティストに花束が用意されており代表の女の子が渡してくれた。

上述したが次の日にアクティビティに参加してくれた前沢小学校4年生全員から手紙が届いた。手紙には熱いメッセージと、曲を聞いた時のイメージした絵を描いてくれていた。

コンサート

タイトル：齊藤一也ピアノリサイタル～想い描くクラシック～

期 日：令和2年11月21日（土） 14：00～16：00

会 場：前沢ふれあいセンター チェリーホール

参加者：163名

コロナ禍のおり、終息への祈りを込め、バッハ：主よ人の望みの喜びよ、から始まった。前半は愛や自然をテーマにした曲を中心に演奏した。アーティスト自身がフランス、ドイツ生活時代に撮った映像を反響板に直接投影して、演奏曲とリンクするよう工夫し想い描くクラシックに誘った。曲の合間には、入り日に案内した奥州市を象徴する北上川の話や、自宅のある山梨県の話、前沢小学校で実施したアクティビティの話など、来場していた小学生やお客様を和ませていた。楽曲の説明もしっかりしていたのでアンケートにも、サービス精神、お人柄、分かりやすいなどの表現が多い。前半はラカンパネッラで閉めた。

後半は映像を使わないで照明を落としスポットを柔らかくアーティストに当て、語りと、圧倒的な超絶技巧でお客様を引き付けた。アンコールの、ドビュッシー：月の光では川越しの夜景映像を投影し、お客様を魅了した。最後はショパン：子犬のワルツと猫ふんじゃったをミックスアレンジ演奏。お客様を全員笑顔にして送り出し、あっという間の2時間を終えた。アンケート内容は絶賛の嵐！ハートのマークもいっぱいあった。



① 応募の動機・事業のねらい

奥州市前沢の方に、気軽な気持ちで生の音楽に触れる場の提供を継続的に行うことで芸術文化の浸透を図りたい。また、会館職員の技術力、制作力、運営力を向上させていくことにより創造性豊かな地域づくりに寄与したい。

② 企画のポイント

「クラシック音楽の入り口に案内したい。」というのがスタートです。クラシック音楽に魅力を感じるのは曲を聴いていて状況が浮かんできた時です。そこで、想像を導くような情報をうまく提供できれば曲と思いがリンクして琴線に触れ、そうなれば自ずとクラシック音楽を意識し始めると思います。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

分かりやすくするため、内容が稚拙になるのではないか。アクティビティ先の撮影許可。コロナ感染症の発生状況によるアクティビティ先の対応。個人情報保護法、コロナ感染症対策の徹底からプレイガイドを当館だけにしたことによる集客数の減少。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

内容が稚拙になるのでは…コーディネーターとアーティストの創造力で、アーティスト自身が海外で撮った写真や、バレエの映像を使うことでより分かりやすく華やかで重厚で異国情緒を感じさせることができた。小学校で動画などの撮影に難色を示したので地域創造担当者から助言をいただき、使用目的、掲載条件について校長先生と話し合い、その内容を書面化することで理解を得た。コロナ感染症の影響で小学校から中止の話が出たが体育館に変更すること、関東方面からの訪問者を最低限に抑えること、またその人たちのPCR検査、「地域創造の事業における新型コロナウイルス感染防止の取組みについて」の提出、おんかつ関係訪問者全員の、開催日より2週間前後の体調記録の報告などにより開催に至った。これについても地域創造担当者、コーディネーターの指導をいただいた。当初はコロナ感染症対策の為、集客数の減少は致し方なしの判断。

⑤ 事業を実施しての成果

撮影許可、コロナ感染症について、学校側と真摯に協議することにより信頼関係を築くことができた。また、学校への連絡、お願い等は全て説明を入れ書面にして提出した。生徒、担任からの手紙を見るとアクティビティ内容が評価されているし私自身、実感としても捉えることができた。アクティビティのクオリティを上げるためコーディネーターとアシスタントがアーティストに対し率直に発言するが周りのスタッフには配慮し、地域創造担当者を含めメリハリが際立ちとても良い環境作りができ充実した事業内容となった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

素晴らしいコンサート内容だったのに、コロナ禍といえ集客数が少なかった。正直に言えばこれほど素晴らしいアクティビティとコンサートになるとは思っていなかった。これならもっとやれることがあったと後悔している。また、アクティビティ、コンサートの内容が充実したのは、コーディネーターとアーティストの創造力の賜物であることから、次回、同等のクオリティで事業が行えるのか危惧される。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

「前沢ふれあいセンターは良いイベントをやってくれる」と一定の理解をいただいているので、ある程度の固定客がある。しかし純粋なクラシック音楽になると影をひそめる。試行錯誤しながら一時的に集客できて次回以降に繋がらない。今回この地域で「齊藤一也ピアノリサイタル～想い描くクラシック～」を公演して、特別なことをやった訳ではないし集客数として結果を得られなかったとしても、しっかりと手応えを感じた。このクオリティのコンサートを継続して開催できれば、「前沢ふれあいセンターのクラシックはいいよ」となり、一番確実な口コミ、あるいは横の繋がりで集客数は増えていく。そんなやり方が応募の動機の一つでもある、この地域にクラシック音楽を通して芸術文化の浸透となるのでは。

「音楽ってやっぱすげーや。齊藤さん、人変えちゃうんだもん。」

本公演後の反省会で聞いた、担当者の大橋さんの言葉である。今回の音楽活性化事業（以下おんかつと記載）は、事業の本質的な価値や意味を改めて考えさせられる、初心に帰ることが出来た機会であった。詳しくは後述するが、まずは忘れかけていた音楽へのピュアな気持ちを思い出させて下さった大橋さん含む関係者の皆様、アーティストの齊藤一也さん、地域創造スタッフに感謝を伝えたい。

〇はじめに

岩手県奥州市は、水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村の5市町村が合併し、平成18年2月20日に誕生した、比較的新しい市である。北は北上市・西和賀町・金ケ崎町・花巻市、南は一関市・平泉町、東は遠野市・住田町、西は秋田県に接し、内陸南部に位置する。今回の会場は、前沢ふれあいセンター。派遣アーティストはピアニストの齊藤一也さん。前沢ふれあいセンターは、例年、前沢小学校4年生向けに所属アーティストがアウトリーチを実施しており、過去にも地域創造事業に携わった経験豊富な2名のベテランスタッフもいらっした。しかし主担当である大橋さんは、音楽事業を担当するのは初めてであり、アーティストの齊藤さんもおんかつ初回という、“はじめて”が結集したおんかつであった。また、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、4月の研修も中止になり、事前のオンラインでの顔合わせや課題ヒアリングで代替されるなど、我々スタッフも“はじめて”が多かった。

大橋さんが目指したのは、『目でみるクラシック』。耳で楽しむだけではなく、視覚からも楽しめるような親しみを感じられる時間を市民の皆様にお届けしたいというご希望を強く持たれていた。下記、どのような形で実現されたのか、アウトリーチとコンサートについて記述する。

〇アウトリーチ

今回は、奥州市前沢小学校の4年生に対して計4回。4年生は上記の所属アーティストによる毎年アウトリーチを経験するはずだったが、今年度は感染症予防対策もあり、中止となっていた。今回のおんかつが実施されることで芸術に触れる機会が継続することを非常に喜んでいらした。大橋さんは、生徒のみならず、大人（先生）にも響くアウトリーチを希望されており、アーティストの音楽に対する真剣な姿勢を感じ取ってほしいという願いが込められていた。

プログラム内容は、齊藤さんが留学時代に撮ったヨーロッパ各国の風景写真をスクリーンに投影し、生徒に自由に想いを馳せて演奏を聴いて頂く、バレエの映像に合わせてトイピアノを演奏する等、工夫が施されていた。何よりも、アーティスト齊藤さんが何を想って演奏しているのか？楽曲をどのようにとらえているのか？をシンプルに生徒たちに伝えることを軸にして、アウトリーチ前日のホールリハーサルで、関係者全員でプログラムを精査した。

残念ながら、前沢入りの少し前から感染者数が増加し、会場が体育館になるなど、少々緊張感のある初日だったが、齊藤さんの演奏を聴いた先生方がすっかりファンになってくださったおかげで、全4回とも温かい雰囲気の中で実施することができた。

これも大橋さん、スタッフの皆様の事前のお計らいあってのことだったことも、記載したい。

〇コンサート

上記の通り、普段コンサートにお越しにならない方々にも楽しんでいただけるようなコンサートにしたいということと、視覚でも楽しんでいただきたいというコンセプトだった為、題名は“齊藤一也 ピアノリサイタル～想い描くクラシック～”。前半は、イメージがしやすいクラシックホールに写真を投

影し、齊藤さんの演奏に合わせて見て聴いていただいた。これはアンケートでも「世界旅行へ出かけた気分を味わえた」「音が体にすっと流れてきた」等、大変好評いただいた。また後半は、齊藤さんが特に力を入れている曲目をしっかりと聴いていただくという2部形式になっていた。お客様からは、齊藤さんの演奏から伝わるお人柄やコンサート内容にとてもご満足いただいた様子が伺え、コンセプト通りのコンサートとなったといえよう。

○おわりに

アウトリーチ最終日に、体育館に設置してあったヒーターの周りで雑談をしていた時である。大橋さんが、「齊藤さん、また奥州市にきてくれないかなあ…」とポロッとこぼされていたあの瞬間が、今回のハイライトだったと思う。そう、この事業は“人”。この一言に限る。担当者含むホール関係者の皆さま、アーティスト、スタッフの化学反応が作用すると、相乗効果が生まれる。今後、様々なアーティストが奥州市を訪れると思うが、是非、面白い化学反応をこれからもたくさん起こしてもらいたい。音楽の価値、人の価値、あらゆる本質的なコアな部分を改めて考えさせてくれた、忘れがたいおんかつとなった。

実施団体：長井市

実施時期：令和3年2月26日（金）～令和3年2月28日（日）

出演アーティスト：梅津 碧（ソプラノ） 齋藤 友佳（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：学校みんなでSing a song

期 日：令和3年2月26日（金） 10：55～11：40

会 場：長井市立伊佐沢小学校 多目的ホール

参加者：児童 49名、教職員 14名

長井市立伊佐沢小学校の全児童49名（51名中2名欠席）に向けてアクティビティを実施。伊佐沢小学校は市内でも特に英語教育に力をいれており、主催者側からは英語の曲をリクエスト。4年生で学習するエーデルワイスを英語でご披露いただいた。

児童たちは、初めて聞くソプラノの声に驚いている様子だったが、アーティストの二人から質問を投げかけられると、積極的に挙手をするなどコンサートを楽しんでいただいた。

コンサート終了後には代表児童から花束とお礼のメッセージが伝えられるなど温かい雰囲気でのコンサートが進行した。



タイトル：旧郡役所で体感クラシック

期 日：令和3年2月26日（金） 15：00～15：45

会 場：小桜館 ホール

参加者：長井市 大町・十日町・高野町にお住いの一般の方 17名

碧さんのご実家がある地域の皆さまに碧さんの歌声と成長を楽しんでいただきたいとの思いから、大町地区・十日町地区・高野町地区に呼びかけを行い、17名のお客様にご来場いただいた。初めて碧さんの歌声をお聞きになるお客様も多く、広く音楽の魅力をお伝えすることができた。

主催者側からは、音楽の道に進まれたきっかけについて歌をとおして紹介してもらいたいとリクエストしており、長井市と縁のあるオペラ「ゼッキンゲンのトランペット吹き」より“私のあなたへの愛、想いのすべて”をご披露いただいた。



タイトル：木造校舎で体感クラシック

期 日：令和3年2月27日（土） 13：30～14：15

会 場：旧長井小学校第一校舎 くつろぎ・交流スペース2

参加者：長井市立長井南中学校吹奏楽部生徒 16名、顧問 1名

旧長井小学校第一校舎を会場に、長井南中学校吹奏楽部の生徒16名に向けコンサートを実施。碧さんが音楽の力と英語やドイツ語を使って海外で活動する様子や体験を、夢に向かって進んでいる中学生に向けて発信してもらい、生徒達の背中を押してもらいたいとリクエスト。碧さんからは多くの人との出会いを大切にしてもらいたいという点と、様々なことにチャレンジしてもらいたいとのメッセージを“糸”の歌声をとおして発信していただいた。

曲の前に目を閉じて、情景をイメージさせながら演奏を行うなど、碧さんにとって新しい方法で歌声を伝えていただいた。



タイトル：木造校舎で体感クラシック

期 日：令和3年2月27日（土） 15：30～16：15

会 場：旧長井小学校第一校舎 くつろぎ・交流スペース2

参 加 者：長井市立長井北中学校吹奏楽部生徒 18名

旧長井小学校第一校舎を会場に、長井北中学校吹奏楽部の生徒18名に向けコンサートを実施。碧さんが卒業された母校ということで、生徒達も親近感を持って参加している様子だった。碧さんが音楽の力と英語やドイツ語を使って海外で活動する様子や体験を、夢に向かって進んでいる中学生に向けて発信してもらい、生徒達の背中を押してもらいたいとリクエスト。碧さんからは多くの人との出会いを大切にもらいたいという点と、様々なことにチャレンジしてもらいたいとのメッセージを“糸”の歌声をとおして発信していただいた。

ドイツ語の歌に出てくる単語を聞き取れるか呼び掛け、生徒達には集中して音楽に向き合っていたいただいた。

コンサート

タイトル：梅津碧コンサート ～歌って・感じて・伝わって～

期 日：令和3年2月28日（日） 15：00～17：00

会 場：長井市民文化会館 ホール

参 加 者：222名（うち高校生以下16名）

旅をテーマに梅津碧さんが長井航空の機長、齋藤友佳さんが客室乗務員となって、お客様と音楽の世界旅行を楽しんだ。碧さん自身が各国を訪れた際に撮影した写真をホール壁面に投影する演出のほか、歌詞の和訳も投影し、それぞれの曲を身近に感じていただけたと感じる。アーティストからの呼び掛けに対して、笑い声や感心の声ができるなど、温かい雰囲気の中、コンサートが進行し、アクティビティで披露していただいた曲のほか、全12曲を演奏していただき、透き通るようなソプラノの歌声に多くのお客様にご満足いただけた。



① 応募の動機・事業のねらい

長井市民文化会館が長い改修を終え、令和2年9月から一般開放された。同時に策定を行った長井市芸術文化ビジョンでは、文化会館の運営に若い世代に関わってもらったり、事業PRのために会館内だけでなく外に出向いてコンサートを行ったりするよう事業を計画している。このため、おんかつ事業で行うアウトリーチ活動はまさに当市が目指す事業の姿と重なったこと、また、おんかつ登録アーティストに長井市出身のソプラノ 梅津碧さんが登録されたことが大きな応募の動機となっている。

事業全体のねらいとしては、音楽をとおして、世界の多様な文化に触れ、聴いてくださる方の国際感覚・世界観を広げたいとの思いで取り組んだ。

② 企画のポイント

- ・梅津碧さんが海外で学んできた音楽の背景を伝えていただくこと。
- ・碧さんご自身が英語・ドイツ語などを使って世界的に活動しているなかで得られた文化的な体験を伝えていただくこと。
- ・歌を学ぶきっかけになった出来事を振り返り、夢に向かって進んでいる若い世代の背中を押していただくこと。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・コロナウイルス感染症予防対策が必要だったこと。
- ・コンサート会場でプロジェクターを使用して映像・歌詞を投影する必要があること。（投影方法、照明との干渉、機材の準備等）
- ・各アクティビティ会場への集客が難しかったこと。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・コロナウイルス感染症予防対策
アクリルパーテーションの設置、こまめな換気の実施、各会場の入場制限、お客様へフェイスシールドの配布、入場時の検温・手指消毒依頼
- ・プロジェクター使用
1台のPCから2台のプロジェクターへつなぐため、機材レンタルを行ったほか、事前のテストを数回実施して調整を行った。
- ・アクティビティ会場への集客
各地区の代表者や各学校の教頭先生に対し、何度も依頼を行ったうえで、先方の希望を優先して会場準備を行った。

⑤ 事業を実施しての成果

- ・アクティビティにおいては、幅広い年代に梅津碧さんの歌声を届けられたほか、司会進行の際は市民文化会館事業であることと、本番のコンサートが予定されていることを伝えられた。案内を聞いて、コンサートに来場されたお客様もいたことからPRの成果があったと思う。
- ・本番のコンサートでは、碧さんの歌声・演奏に対して高い評価をいただいた。定期的に開催して欲しいとの声もあり、音楽の魅力を伝えることができた。
- ・舞台の照明・写真投影・演出についても、これまでとは違った取り組みで鑑賞しやすかったとの評価

をいただいている。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

- ・担当の経験が浅いということもあり、準備に時間がかかってしまった。
- ・多くの人を巻き込んで、役割分担を丁寧に説明しながら進めた方がよかった。
- ・アーティストに対して、もっと具体的にコンサートのテーマを伝えられればよかった。
- ・今後も音楽・文化の種まきを行っていくために、大きなイベントだけではなく、市民の皆さまにとって身近な音楽・文化活動を定期的に提供する必要性を感じた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

- ・地元出身の登録アーティストの公演ということもあり、各コンサートはある程度集客につなげることができたが、花田コーディネーターのご指摘にあったように、定期的にいらっしゃるお客様だけでなく、新しいお客様の開拓に注力すべきだった。そのためには、反省点・課題にも挙げているように、定期的に音楽・文化活動を提供し、どのように音楽・文化に触れ、楽しんだらよいかを伝えていく必要があると感じた。
- ・碧さんや友佳さんのようなアーティストが地元でいらっしゃることは、非常に貴重であり、今後も市・ホールの事業にご協力いただけるようにコミュニケーションをとっていきたい。

山形県の長井市は、南部の置賜地方にある人口2万5千人強の市である。縄文時代の遺跡が数多く残っている町として知られており、江戸時代には最上川舟運の港町として栄えて財を成し米沢藩の財政を支えた商業都市として古くから繁栄してきた土地である。現在は、不伐の森条例を制定し自然保護に務める緑豊かな市として、国指定天然記念物の「伊佐沢の久保ザクラ」や、日本有数のあやめ公園などもあり、「水と緑と花のまち」として魅力的な市政を展開している。

また、クラシック音楽への理解が深い土地でもある。今回出演の梅津碧さんが声楽家を志すきっかけとなった、姉妹都市バート・ゼッキンゲンが舞台のネスラー作曲のオペラ「ゼッキンゲンのトランペット吹き」が日本初演された際には、多くの市民が参加するなどクラシック音楽も注目されている。

今回のおんかつの舞台となる長井市民文化会館は、1974年に市の文化拠点として建設されたホールだったが、老朽化のため大規模な改修をし、2020年9月に再オープン。2021年2月現在は、市が直轄運営する施設である。

今回はそのリニューアルを機に、市民文化会館に若い人たちが集って欲しい、クラシック音楽の魅力を感じて欲しいというテーマを軸に企画が進められた。さらに、市が英語教育の推進に力を入れて国際交流を図っていることから、内容は音楽で世界を旅するというコンセプトを中心に企画を構成。アクティビティ先は小学校で1回、梅津碧さんのご実家に近い文化施設で1回、地域の中高生が集まる施設で2回行うことを計画した。

実施期間には、新型コロナウイルス感染症が日本国内だけではなく世界中に蔓延した。そのために、東京都をはじめとする10都府県で緊急事態宣言が発令されている中での開催となり、感染予防対策には最大限の注力がおかれたことも最初に記しておく。

まず、伊佐沢小学校での「スクールコンサート」として開催されたアクティビティは、小学校の全児童を対象として行われ、最初に梅津碧さんが発した声に驚いた子供たちの表情が感動的で、強いインパクトを与えた。続いて、市指定文化財である小桜館（旧郡役所）では、今回のアクティビティの中では唯一の大人を対象としたものであったが、梅津碧さんの実家から近いというゆかりがある土地だったこともあり、会場の雰囲気と相まって親和性が高い心に響くものだった。そして、国登録有形文化財であり、学びと交流の拠点となっている旧長井小学校第一校舎で2回予定されていたアクティビティは、当初、一般の中高生に幅広く声をかける予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、なかなか地元の学校の協力も得難い状況であったが、2校の中学校の吹奏楽部の生徒が参加。音楽に触れるもの同士の繋がりが強く見受けられ、演奏を真剣に聴く表情や熱い拍手が印象的であった。今回、主催者はアクリルパネルを用意し、参加者にはフェイスガードを提供するなど、心強い様々なケアや予防対策をしていただいたが、感染予防対策を万全にするために、また声楽というスタイルの性格上、アクティビティの形がコンサート形式になってしまうことは避けられない状況ではあった。しかし、ただ単に演奏を聴いてもらって説明するというスタイルにならず、もっと身近に演奏家を感じてもらい、参加者と一体となって楽しみ、共感できるようなwithコロナの時代の内容や手法を、考えていかなければいけないと感じた。

コンサートは、世界を巡るというのがコンセプトで、プロジェクターで字幕やヨーロッパの風景を映し、照明にも色を加えるなど音楽と言葉を駆使して作り上げた魅力的な世界観が特徴であった。休憩を含めた約2時間の長編だったが、旅行気分も体感できるアイデアが功を奏し、聴衆の心を深く惹きつけた。今回は長井市の地元出身音楽家が、ヨーロッパ留学から帰国後の凱旋公演ということも追い風になったと思うが、多くの人が演奏を聴く機会を求めて来場。最大のターゲットであった若い人も多数見られ盛況であった。また、市民文化会館をはじめとするスタッフの協力体制はとても素晴らしいもの

であり、新型コロナウイルス感染症への対策も万全に、人の動線なども工夫して運営するなど目を見張るものがあった。そして何より、この状況下で開催できたことに心から感謝したい。

長井市民文化会館は指定管理者制度により、2021年度から管理が委託されることとなった。状況が変わることにより様々な対応が求められることになるが、今回の担当者をはじめ関わった多くの人々がそれぞれの場所で、持続的に音楽を活かした地域づくりを企画し続けて欲しいと願っている。長井市では2020年10月に「長井市芸術文化ビジョン」が策定され、芸術文化の価値を捉え直し、地域づくりや課題解決に寄与し、人々の交流を活性化することを挙げていることに注目したい。市民文化会館は、その活動の先導的な役割を果たす存在になり、芸術文化の拠点となっていくことを目指し、その姿になっていくはずだ。今回のプロジェクトを活かした音楽企画も、ぜひ継続的かつ積極的に取り組んで頂きビジョンの推進の一端を担って欲しい。そして、歴史と伝統ある長井市がさらに魅力ある地域になることを心より期待したい。

実施団体：木之本スティックホール（株式会社ふるさと夢公社きのもと）

実施時期：令和3年3月11日（木）～令和3年3月13日（土）

出演アーティスト：竹多 倫子（ソプラノ） 石塚 幸子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：可能性は無限大

期 日：令和3年3月11日（木） 10：40～11：25

会 場：南郷里小学校 音楽室

参加者：5年生 32名

オー・ソレ・ミオ、ゴー・ザ・ディスタンスなどの歌唱に始まり、途中、「待ちぼうけ」による歌唱指導（代表者2名前に出てもらって声の出し方のエクササイズ体験を行う）。自分の歌手になりたい夢に対して、あきらめない気持ちで行動することの大事さを伝えた。最後にオペラアリア（ドヴォルジャーク作曲「ルサルカ」より「月に寄せる歌」）を歌唱してオペラ歌手としての声量を実感させ締めくくった。



タイトル：可能性は無限大

期 日：令和3年3月11日（木） 14：00～14：45

会 場：つつじ作業所 作業室

参加者：利用者 38名

作業所にて、オー・ソレ・ミオ、待ちぼうけ、フニクリフニクラなどをコンサート形式で披露。途中手拍子などを要求したり、琵琶湖周航の歌を軽く口ずさんでもらったりして一体感あるアクティビティを構築した。終了後帰りの車まで利用者の皆さんが見送ってくれるなど、深く交流が図れたアクティビティとなった。



タイトル：可能性は無限大

期 日：令和3年3月12日（金） 10：40～11：25

会 場：南郷里小学校 音楽室

参加者：5年生 31名

オー・ソレ・ミオ、ゴー・ザ・ディスタンスなどの歌唱に始まり、途中、「待ちぼうけ」による歌唱指導（代表者3名前に出てもらって声の出し方のエクササイズ体験を行う）。自分の歌手になりたい夢に対して、あきらめない気持ちで行動することの大事さを伝えた。最後にオペラアリア（ドヴォルジャーク作曲「ルサルカ」より「月に寄せる歌」）を歌唱してオペラ歌手としての声量を実感させ締めくくった。



タイトル：可能性は無限大

期 日：令和3年3月12日（金） 13：40～14：25

会 場：南郷里小学校 音楽室

参加者：5年生 33名

オー・ソレ・ミオ、ゴー・ザ・ディスタンスなどの歌唱に始まり、途中、「待ちぼうけ」による歌唱指導（代表者2名前にも出てもらって声の出し方のエクササイズ体験を行う）。自分の歌手になりたい夢に対して、あきらめない気持ちで行動することの大切さを伝えた。最後にオペラアリア（ドヴォルジャーク作曲「ルサルカ」より「月に寄せる歌」）を歌唱してオペラ歌手としての声量を実感させ締めくくった。



コンサート

タイトル：ふれあいのうた～歌で世界へ・歌の世界へ～

期 日：令和3年3月13日（土） 14：00～16：00

会 場：木之本スティックホール

参加者：91名

「ふれあいのうた～歌で世界へ・歌の世界へ～竹多倫子ソプラノリサイタル」と題して、第一部「日本の歌」第二部「歌で世界へ」という構成。日本の歌では良く知られた名曲を盛り込み親近感ある舞台に。「歌で世界へ」ではコロナ禍で容易に旅行できない昨今、各国の歌を自身のエピソードなどを交え紹介。県民周知の「琵琶湖周航の歌」やピアノ独奏ショパン「華麗なる大円舞曲」も盛り込み、最後はオペラアリア「月に寄せる歌」を熱唱した。



① 応募の動機・事業のねらい

地域の人々に音楽の喜びを伝えて、興味や関心を持ってもらいたい。

興味・関心⇒わたしもやってみたい・聴きに行きたい

⇒①こどもや若年層の音楽体験者が増える～教室の活性化・吹奏楽部や合唱部の部員が増える

⇒②一般～高齢者の方々の趣味や嗜好に音楽が加わる～老後のコミュニティーの充実、コンサートに出かける意欲の増進

⇒ホールを使って成果発表をしてみよう、演奏会に行ってみようという人々が増え、ホールと地域住民が共に活性していくことを目指す。

② 企画のポイント

①第一線で活躍する、一流のソプラノ歌手の歌唱を体験してもらうこと

→本物の芸術体験をとおして興味を喚起し、実体験や鑑賞することへの意欲を持ってもらう。

②コンサートでの芸術体感から、ホールのポテンシャルの認知を高める。

→ここに来れば芸術を感じ自分を高めることができるという思いを持ってもらう。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

①コロナ禍においてホール近隣の小学校において、日程上アウトリーチを受け入れてもらえなかった。

②期間が短く、コンサートの告知集客において準備が整わず苦勞を強いられた。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

①においては障害者就労施設を対象に加えた。また、市内全域に対象地域を広げ市役所生涯学習文化課の協力を得て、アウトリーチ先を確保できた。障害者就労施設に関しては、かねてより公共ホールの使命として、障害者を対象とした事業の模索をしていたのでかえって良い経験が積めた。

②においては新聞等の記事広告を促進するとともに、館長以下率先してアウトリーチ先関係者に声掛けをして頂き、招待客の割合が増えてしまったが、当館でのコロナ禍における集客の平均を上回る集客ができた。

⑤ 事業を実施しての成果

アウトリーチにおいて、コーディネーターとアーティストがアクティビティを構築していく様がよくわかり、今後の活動においてとても参考になった。とりわけ、アクティビティに対するアーティストの思いを汲みながら、集約や手法を導いていく過程は勉強になった。また、アクティビティ先との詰めなければならない事項など実践を通して良い経験ができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アーティストと直接接するまでが長かったために、コンサートプログラムにおいて擦り合わせが充分できなかったと反省している。アーティスト側のできること、やりたいことを早くに打ち合わせないと、広報の時間が短くなるのでその点が課題だと思う。アクティビティ先の決定の遅れからそのようになったと思うが、コンサートにおいては先に組み立てることは可能だったと思われる。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

昨年よりさまざまなクラシック音楽のコンサートを企画したが、今回のアンケートを見てもまだまだオペラを初めて体験したとか、ソプラノ歌手を初めて聴いたとかの声が散見された。まだまだ、粘り強く企画を積み重ねていく必要があると思った。また、アウトリーチにおいてはこの1回で対象にできた生徒は100名ほどにとどまり、さらに回数を重ねていく必要があると考える。今回を機会に、県主体の活動、地元企業主体の活動、市主体の活動それぞれを意識することができた。それらを俯瞰的に見てバランスよく機会提供できるように活動していきたいと考えた。

<はじめに>

長浜市は、滋賀県湖北地域に位置する。2010年に1市6町が合併しており、市の面積は東西25キロ、南北40キロに渡っている。人口は、約11万6000人。木之本スティックホールは、旧木之本町に平成2年に建てられた築30年余りのホールで、市民の福祉と生活文化の向上を目的として文化小劇場と保健センターの複合施設として建設されている。ホール（文化小劇場）の収容人数は、300人で、ステージから観客の顔を見渡せるようなホールである。2020年度より、株式会社ふるさと夢公社きのもとが指定管理者となっており、今回担当くださった加藤さんのお話によれば、昨年までは市の直営だったが、貸し館がメインで、自主事業などはほとんど行われていなかったとのことだった。

<スタッフ顔合わせから実施まで>

長浜市公演は3月に予定されていたが、8月下旬にZoomを用いて顔合わせを行った。4月に転職したばかりという加藤さんから、ホールの現況や、おんかつに対する想いをヒアリングした。このときの参加者は、木之本スティックホールから加藤さん、赤木コーディネーター、地域創造から山之内さんとサブコーディネーターの酒井。

加藤さんからは、地域の活性化なしには、ホールに来てもらうことも難しいと感じアウトリーチはやらないといけないという認識に至ったこと、長浜市内でアウトリーチは行われているようだが、市の生涯学習課が実施しているものもあれば、アーティストが個別にやっているものもあり、その辺の交通整理が必要だと感じていること、基本的にはコンサートに行けない人に体験してもらうことが大事だと思っており、アクセスが悪いところや、ホール周辺にアプローチしたいこと、今回は導入プログラムということで活動のノウハウ、作り上げ方を勉強したいをといったアウトリーチに対する想いをお聞きした。また、ホール公演については、収容人数300人という特性を活かし、室内楽、バロック、音楽のリサイタルなどを定期的に行っていきたいこと、本物の芸術の背の高いコンサートを体験してもらいたいことが一番だと思っていること、アーティストの良さが発揮されるような（どんと。表現してもらえるような）ものができると良いというお考えを聞くことができた。同時に、チケットの売り上げは厳しいこと、ホール自体の認知度が下がってきているので、色々やって声をあげていかなきゃいけない過渡期だとする課題も提示された。

実施先の調整は難航し、8月に候補として名前が上がっていた小学校からは、コロナの影響で授業スケジュールが詰まってきて難しいと見合わせの連絡が入った。また、病院での実施なども検討されたが、やはりコロナ禍でのリスクを鑑み実施は見合わせとなった。実施先が確定しない中、加藤さんからは、「3つの「小」のコンセプトは理解するのだが、少人数でないと受けられないというケースが多く、どこからも断られているという実態が浮かび上がりました。アクティビティを運営する中で3つのsmallは理解できますが、どの団体もそこにこだわるために機会ロスを起こしているかもしれないという現状は、自分の中ではかなり考えさせられることです。」という課題が提示されている。その後スティックホールの自主公演が全て中止になるなど、実施そのものも危ぶまれたが、12月中旬によくアクティビティの実施先が確定した。1箇所は8月のミーティングの時から候補としてあがっていたつつじ作業所（就業支援施設）。そしてもう1箇所は、木之本からは20kmほど離れたところにある南郷里小学校となった。南郷里小学校では、コロナ禍で鑑賞教室は全て中止となっており、5年生は体験活動が何もできておらず、こういった機会はありがたいと手があがったとのことだった。

<アクティビティーについて>

実施先の確定に時間を要したこともあり、ソプラノの竹多倫子さんと内容について相談が始まったのは実施わずか1ヶ月前であった。

小学校でのプログラムについては、学校からのリクエストとして、現在声を出すことは制限があるものの、発声方法など取り入れてもらえると良いかもしれないということ、また強い要望ではないが、教科書に掲載されている曲は喜ばれるといったことがコーディネーターから伝えられた。竹多さんからは「可能性は無限大」というテーマで実施したい提案があり、実施したプログラムは、学校からのリクエストがうまく組み込まれた形で、ご自身のライフストーリーと歌を重ねてゆくものとなった。

つつじ作業所については、事前の情報として20~80代の軽度の知的障害、精神障害を持つ方が通う就業支援施設であること、スティックホールともすでに関係性があり、過去に映画鑑賞会への参加や、コンサートに招待したことがあること、施設のスタッフからは声かけ、コミュニケーションはとってほしいというリクエストがあることが、コーディネーター、加藤さんからアーティストに伝えられ、竹多さんからトーク付きコンサートのプログラムが準備されることとなった。

=====

—南郷里小学校実施プログラム—

開催場所は音楽室。児童とアーティストの間には、180cm高アクリルシート3枚を設置し、アーティストと児童の間の距離も可能な限り確保した上で、児童用の椅子は間隔を空けて設置。

授業の始まりの挨拶が終わると、ピアニストが先に登場し、《オーソレミオ》の前奏を弾き始め、竹多さんは歌いながら登場。オペラ歌手であるという自己紹介の後に、小さい頃の竹多さんの夢が語られる。幼稚園の頃から歌手になりたいという夢があったが、周りの人には歌手になるなんて難しいと諭され、小学生の頃には、諦めるようになっていた。そんなときに出会ったディズニー映画「ヘラクレス」の《Go the Distance》。この曲を聴くと、自分が何にでもなれるという気持ちになった。みんなも自分の未来、可能性を想像しながら聴いてほしいと、《Go the Distance》が歌われる。この曲の主人公ヘラクレスは、自分の可能性を信じて、自分の人生・未来を切り開いたと、自分の人生・自分の未来は自分の行動で作られるものというメッセージが告げられる。何も行動しないとどうなるかわかる曲として《待ちぼうけ》が歌われる。偶然や奇跡は続かない。自分で何か行動をすることで可能性に近づけるとい話の後、発声練習コーナーに入る。事前に選んでもらったクラスの代表2名がオペラ歌手の発声練習にチャレンジする。これは竹多さん自身が毎日行ってきたトレーニングであり、可能性を自ら少しずつ広げてきたという話に繋げていく。この後、竹多さんのライフストーリーに戻り、高校生の時初めて自分の気持ちに真剣に向き合い、両親に歌手になりたいとお願いをした話とともに、「言葉にできない感情やエネルギー」を感じたことがあるかという問いかけがあり、《春に》が歌われる。最後に、色々な気持ちが表現されている曲として、オペラ「ルサルカ」から《月によせる歌》が歌われる。「ルサルカ」については、物語と、それを表す音楽を交互に紹介しながらの導入を行なった上で鑑賞する。プログラムの最後は、竹多さんには、まだまだ夢がある話、空に天井がないように、みなさんの可能性も無限大です！というメッセージで締めくくられる。

—所感—

コロナ対策としてのアクリルシートと、距離を保った席の配置という場の設えは、少なからず参加する児童に緊張感を与えるものなのではないかと感じた。児童の席に座ってみると、アクリルシートの向

こうにいるアーティストは、ひょっとすると水族館でガラス越しに魚を見るような感覚に近いのではないかとすら思った。

コロナの影響は、アウトリーチで大切にされる3つの「small」を阻んだ。コロナ禍でできることを、気をつけながら最大限行なったのが今年度の取り組みだったと感じる。来年度もコロナの影響は避けられないことを鑑みれば、この環境を「仕方ない」と捉えるのではなく、コロナ禍の場の設えを前提としたプログラム作りにより積極的に取り組むことはできないのだろうか。

竹多さんも、《オーソレミオ》を歌いながら登場した時点で「まずい」と感じた回があったとおっしゃっていた。咄嗟に、トークに地域ネタを挟むなど、場を和ませようと機転を利かせてはいたものの、児童との距離感に苦勞をしていたことは否めない。アウトリーチの現場が、アーティストと参加者間の非言語のコミュニケーションが大事な場所であるからこそ、物理的な距離や、アクリル板を挟んで行う時の表現方法については今後検討の余地があるだろう。

—つつじ作業所実施プログラム—

普段作業場として用いている大きな部屋の机を片付け、距離を開けながら椅子を並べた。アップライトピアノは加藤さんが運び込み、部屋の前方に設置。

始まりは、小学校のプログラムと同様に「オーソレミオ」を歌いながら登場。その後続いた「フニクリフニクラ」では、手拍子を促したところ大勢が参加。その後は、お話を挟みながら、馴染みのなる日本歌曲コーナーは、浜辺の歌、朧月夜、待ちぼうけと続いた。待ちぼうけでは再び観客が拍手で参加。ピアノソロでドビュッシーの「月の光」が挿入され、「砂山」、「この道」、「夢みたものは」と続き、長浜市と姉妹都市ヴェローナとゆかりの深い「ロミオとジュリエット」「琵琶湖周航の歌」が歌われた。アンコールとして、オペラトスカより「歌に生き愛に生き」が歌われた。

—所感—

施設スタッフの宮澤さんが作りだす明るい雰囲気も相まって、観客とアーティストの間で奇譚のない交流が生まれていた。曲が終わったところで観客から「うまい」と感想が漏れたり、竹多さんが途中お水を取るときに「お水を飲んでいいですか」と問いかけると、「いいよ～」という返答が返ってきたり。終了後は、スタッフとしていたコーディネーターなどにも、率直な感想を伝えにきてくれた。「フニクリフニクラ」で一体となって盛り上がったことがトリガーになり、音楽が一瞬にして垣根なく人を繋ぐということを体現できた交流プログラムとなっていた。

実施団体：広島県 府中市

実施時期：令和2年11月19日（木）～令和2年11月21日（土）

出演アーティスト：石上 真由子（ヴァイオリン） 江崎 萌子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：～ FUCHU・ON（音）～府中学園・ON（音）

期 日：令和2年11月19日（木） 11：50～12：40

会 場：府中学園 音楽室

参加者：8年生1組 38名

8年生（中学2年生）1組を対象にワークショップを実施しました。

生徒達は、緊張した面持ちで身近で聴くヴァイオリンの音色に聴き入っていました。また、人生の転機を迎える中学生という年齢から、異色の経歴をもつ石上さんの経験談（キャリア選択時の考え方や思い等）が盛り込まれ、生徒達は真剣な表情で耳を傾け、心に響くワークショップとなりました。



タイトル：～ FUCHU・ON（音）～府中学園・ON（音）

期 日：令和2年11月19日（木） 14：55～15：45

会 場：府中学園 音楽室

参加者：8年生2組 38名

8年生（中学2年生）2組を対象にワークショップを実施しました。

石上さんの声かけによって和やかな雰囲気となり、また、馴染みの曲の演奏もあり、生徒達の関心を一気に引き寄せていました。生徒とコミュニケーションを取りながらの進行で、アットホームな雰囲気のワークショップとなりました。



ワークショップ終了後も、生徒達がアーティストの近くに行き、話を続けたりサインをねだったりと、積極的な交流が印象的でした。

タイトル：～ FUCHU・ON（音）～府中学園・ON（音）

期 日：令和2年11月20日（金） 11：50～12：40

会 場：府中学園 音楽室

参加者：8年生3組 38名

8年生（中学2年生）3組を対象にワークショップを実施しました。

生徒達は、最初はなかなか手が挙がらなかったが、アーティストのお二人が優しく促してくれたことで、徐々に発言が増えていきました。

2日間にわたり、府中学園8年生（中学2年生）3クラス全員にご参加いただきました。先生から「ワークショップ後においても、この話題になると生徒がよい反応を示します。」と感想をいただきました。



タイトル：～ FUCHU・ON（音）～府中明郷学園・ON（音）

期 日：令和2年11月20日（金） 14：35～15：25

会 場：府中明郷学園 音楽室

参加者：9年生 37名

9年生（中学3年生）を対象にワークショップを実施しました。ヴァイオリンの仕組みや素材について、生徒達とコミュニケーションを取りながらの説明があり、生徒達の熱心に聴き入る姿が印象的でした。

また、事前の打合せで教頭より他学年の生徒にも是非聴かせてあげたいと希望があったため、ワークショップ終了後、7、8、9年生（中学1、2、3年生）（108人）を対象にミニコンサートを行いました。生徒達は、音色や音の迫力を体感していました。

先生から「目を輝かせながら集中して音を聴いている子どもたちの姿から、来ていただいて良かった。新しい世界との出会いに繋がる。」と感想をいただきました。

コンサート

タイトル：ふちゅう音楽コンサート～ FUCHU・ON（音）～

期 日：令和2年11月21日（土） 15：00～17：00

会 場：府中市文化センター 大ホール

参加者：289名

地元オーケストラ（府中シティオーケストラ）の開演前のWelcome演奏で始まり、第1部（ヴァイオリン&ピアノ）、第2部（ヴァイオリンソロ、地元オーケストラ共演）、アンコール（地元オーケストラ共演）と実施しました。

本格的クラシックコンサートを開催する機会が少ない府中市において、プロの演奏家によるコンサートに触れる貴重な機会となりました。

コンサートの最後に演奏するアンコール曲では、前日までのアクティビティやコンサトリハーサル、アクティビティの合間に食べた府中焼き（お好み焼き）や府中市観光の様子をまとめたスライドショーを背景に、地元では誰もが馴染みのある曲を地元オーケストラ共演で演奏いただき、名残のある一体感に包まれての終演となりました。

普段、クラシック音楽に触れる機会がない方も楽しんでいただき、「府中市で音楽を楽しむ」きっかけになったのではないかと感じました。



① 応募の動機・事業のねらい

質の高い音楽を体感する機会を市民や子どもたちに提供し、音楽文化に関心を深めてもらうことで、文化活動を始めるきっかけを作ること、また、これにより文化活動人口の拡充と文化による地域活性化を図ることを目的に開催しました。

② 企画のポイント

近年、吹奏楽が活発な市内中学校とプロの演奏家との交流による中学生の音楽への関心を深める機会の提供や学校の取組みの後押しとなること、また、地元オーケストラ（府中シティオーケストラ）との共演による府中市における音楽活動文化の活性化に繋がることを期待して企画しました。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

各団体及び各アクティビティ先やアーティストとの調整が難しかった。特に、コンサートにおける共演者とアーティストの調整が難しかった。

また、主催者として決定すべき事とアーティストや出演者にお任せするところのすみ分けが難しかったです。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーターや地域創造の方に相談し、事業実施に向けて進めることができました。業務のすみ分けも、コーディネーターが方法や手順を示してくださったので、少しずつ進めることができました。

⑤ 事業を実施しての成果

本格的クラシックコンサートを開催する機会が少ない府中市において、プロの演奏家によるコンサートに触れる貴重な機会となり良い反応でした。

普段、クラシック音楽に触れる機会がない方も楽しんでいただき、「府中市で音楽を楽しむ」、また、音楽文化を深めてもらうきっかけになったのではないかと感じました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アーティスト及び共演者の想いを、鑑賞者や参加者の視点で考えていくことが大切だと感じた。

今後、「府中で音楽を楽しむ」機会や音楽文化に触れる機会を創出していくことが課題である。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

府中市において、日頃、本格的なアーティストを招いての大規模なコンサート等は開催できておらず、クラシックコンサート等の音楽活動文化は根付いていないと感じていた。しかし、今回の公共ホール音楽活性化事業を行うことによって、市民が「府中で音楽を楽しむ」という需要を感じる事ができた。主催者としても、今回をひとつの機会として捉え取り組んでいきたい。

【はじめに】

広島県の南東に位置する府中市は、人口約37,000人で福山駅からは電車で約40分の距離にあり、産業では「府中家具」と呼ばれる質の高い家具作りが有名なほか、豚バラ肉の代わりにミンチ肉を使用した府中焼きというお好み焼きで町おこしを行なっている。

一方で音楽公演の催しは少なく、「コンサートに足を運ぶ」という機会が市民に少ない状態になってしまっているとのこと。今回のおんかつ事業を通して音楽文化に関心を持ってもらいたい、文化活動を始めるきっかけになって欲しいという府中市の想いのもと、石上真由子さん、江崎萌子さんによる中学生4クラスへのアウトリーチと市民オーケストラとのコンサートが実現された。

【アクティビティ】

今回訪れたのは府中学園と府中明郷（めいきょう）学園の2校。どちらの学校も小中一貫教育（小学1年生～6年生、中学1年生～3年生）を推進しており、9年間を一緒に過ごすので、生徒・先生ともにコミュニケーションが良く取れている様子だった。中学生はこれから自分たちの進路を考えていくという年齢であることもあり、石上真由子さんはアーティスト打合せの中で「今後の進路や人生のことなど考え始める頃かなと思うので、人生の選択についてもアウトリーチで伝えたい」と話していたことが印象的であった。

一ヶ所目の府中学園では初日と翌日午前を使って計3クラスでアウトリーチを行なった。

新型コロナウイルスの影響でマスクが必須の社会となっしまい、生徒・関係者は全員着用。アーティストも演奏時以外は着用という表情や反応が見えにくい中での実施となったが、子どもたちの集中力はとても高く、近くで見る初めてのヴァイオリンや医師免許を持ちながら演奏家としてのダブルキャリアを実現させている石上さんの人生観にとっても興味関心を持っていた。石上さんも1コマ毎に手法を見直し、回数を重ねる毎に子どもたちが石上さんに夢中になっているのが分かった。

二ヶ所目の府中明郷学園は自主性を尊重する校風、音楽に熱心な先生が協力して下さる中、1クラスでの実施に加え、高学年（7年生～9年生）108名に向けて行う体育館コンサートを行なった。コロナウイルスの影響により、学校での行事が軒並み中止となってしまったため、楽しい思い出を作りたいとの学校側の想いから1曲のみ実施した。

【コンサート】

事業開始当初から市民参加型のコンサートという内容は決まっていたため、どうしたら石上さんが“ゲスト”になることなく、市民オーケストラと共演できるかを慎重に考える必要があった。コンサートのタイトルは「ふちゅう音楽コンサート～FUCHU・ON～」。府中市の方々に楽しんでもらいたいという想いで担当の戸坂さん、事業のみなさんで考えていただいた。新型コロナウイルス対策として、客席は50%に制限と常時換気のほか、入口での検温・消毒、COCOAの導入案内と広島県が独自で行なっている「広島コロナお知らせQR」を掲示するなどの準備を行った。コンサートの内容は、府中シティオーケストラによるウェルカムコンサートを開演前に行い、1部は石上さん・江崎さんによる演奏、2部では石上さんの無伴奏とシティオーケストラによる共演という盛りだくさんのプログラム。アクティビティと一緒に過ごした学生には招待券が送られ、幅広い世代の方々が集まったコンサートになった。アンコールでは石上さんとシティオーケストラによる「ふるさと」の演奏。スクリーンに職員の方々が撮影してくれたアクティビティの様子が投影されると会場内は温かな雰囲気に包まれた。

【おわりに】

新型コロナウイルスの影響により全体研修会が実施できなかったため、主担当の戸坂さんとは現地下見でお会いするまで、メールや電話でのやり取りとなった。11月実施に向けてタイトなスケジュールにコロナ対策が加わったこともあり、戸坂さん自身がおんかつ事業を楽しめているのか気になったが、最終日に石上さん・江崎さんとお別れをする際に涙を流されている様子を見て、この事業が有意義だったことを表していたようだった。「担当者」を超えて、同じ時間を共有することで見えてきた個人の熱量こそがおんかつ事業の魅力だと思う。

今回の事業がつながっていくことで点と点が線へ、それがやがて面となって府中市の方々の音楽文化として根付いていくはずだ。

第3部
令和2年度公共ホール
音楽活性化事業
コーディネーター・
アドバイザーレポート

ふりだしにもどるか？ それとも新たな時代に進むか？

新型コロナウイルス拡大の影響による税収の減少が予想されるなか、令和3年度の文化予算、事業費の大幅カットを想定（覚悟）している事業担当者さんは多いのではないのでしょうか？

そうした次年度予算の見通しが立たない状況は、次年度事業のブッキングに大きな影響が出ていて、例年なら年末までには次年度のブッキングを完了しているホールさんでも、年末の時点で7～8割だけしかブッキングが出来てない。残りは様子見をしていたというホールさんも多いと思います。ただ、様子見から一転し実施になった事業については、調整不足、準備不足、広報不足などのミスが起こりやすくなることが予想されます。この報告書を目にされるのは令和3年度前半だと思います。そうした事業を抱えている担当者の皆様は改めてご注意くださいね。

新型コロナウイルスへの対策中の活動

令和2年8月にイベントの入場制限要請の緩和を受け、貸館事業や自主事業、アウトリーチなどが徐々に再開し、公共ホールは正常化に向けて動き出しました。令和2年9月からは、コンサートや演劇など観客が声を発しないイベントの入場制限要請はさらに緩和され満席での開催も可能となりましたが、中高年層をメインの観客層に抱えるクラシック音楽では、すぐに100%販売に戻すことができた主催者さんは少ないのではないのでしょうか？

その後、クラシック音楽のコアな観客層の戻りは予想以上に早いとの噂は耳にしますが、一方で平日マチネ公演やワンコインなど親しみやすいコンサート系を支えてきたライトなファン層については戻りが遅く、令和3年度以降も影響が残るのではないかと予想している主催者さんも多くいます。

アウトリーチやワークショップなどへの影響も深刻で、特に福祉施設や公民館など高齢者の方が多く集まる施設からは『外部の人を受け入れるのは難しい』という話を多く耳にしますし、学校アウトリーチでも音楽室ではなく体育館での実施を希望されることが多くなりました。こうした状況が長く続くとアートとの出会いを逃してしまう人達が増えてくるのではないかと？さらにはアウトリーチ活動自体が下火になってくるのではないかと心配をしてしまいます。

ふりだしにもどる？

この先の公共ホールには、まずは平常時に戻すための活動が求められます。例えば『観客拡大のための取り組み』や『アウトリーチ活動への理解を獲得するための取り組み』などが考えられます。それは、まるでおんかつ事業の初期のような取り組みです。

おんかつ事業がスタートしたのは平成10年（1998年）。

あの頃の公共ホールには『コミュニケーションプログラムは手が掛かるから消極的だ』とか『クラシック音楽には観客は集まらない』『バブルの時には舞台を楽しんでいた人も来なくなった』『だから自主事業を減らそう…』など、ネガティブな考え方をする人が多くいました。コロナ後の公共ホールは『失われた20年』の頃のようなネガティブな公共ホールへと戻っていくのでしょうか…？

いいえ。私はそうはならないと思います。なぜなら、20年前と今とでは『公共ホールの経験値や実績、地域や社会からの芸術活動への理解と期待』などについて比較にならないくらいに成長、拡大しているからです。加えて、その経験値には新たなアイデアを生み出していく力や確実性の高いノウハウなどが詰まっていると信じているからです。

新たな時代に進む？

コロナ禍を乗り越えたとき。ソーシャルディスタンスやリモートに少し疲れているときだからこそ、コミュニケーションの大切さや音楽の魅力を伝えていくことが大切になってくるのではないのでしょうか？もちろん動画配信などを活用して公共ホールの活動を可視化させていくなどの新たな取り組みも大切です。

ホールの運営者としての視点では、安心・安全な施設を確保し、それを観客や施設利用者さんに伝えていくことも大切ですし、経営の安定化を図ると同時に活動への理解を獲得していくことで持続可能なホール運営を実現していくことももちろん大切です。

そんな社会情勢や価値観などが大きく転換していく時代のなかでは、『何を目指して活動するのか？／ミッション（使命）』、『そのミッションをどのように達成するのか？／ビジョン（見通し、展望）』など、ミッション・ビジョンの再構築が重要になってくるだけでなく、地域や社会から求められる多様な活動を効率的かつ効果的に行っていくための技術やノウハウの獲得、人材育成なども重要になります。そして、何よりも、それらを『具体的かつ確実に実現していく力“実践力”』が求められてくるのではないのでしょうか？

コロナ禍の先にあるのは“ふりだし”ではなく、そうした『新しい時代』であると私は信じています。

『失われた20年』の時に、未来を信じてアウトリーチという未知の活動に取り組むことでネガティブな時代を乗り越えた公共ホールスタッフの皆さんのように、この時代の公共ホール運営を任されている私たちも未来を信じて、みんなで力を合わせて『新しい時代』を切り開いて行きましょう！

昨年は新型コロナウイルス感染症の影響により全人類が未曾有の災禍に見舞われた一年であった。その影響は未だ出口を見出せず、ワクチン開発と変異種の発覚、日々の感染者推移と経済活動とのせめぎ合いが続いている。クラシック音楽も含まれる所謂「イベント」に至っては、第一次の緊急事態宣言の一月以上も前から自粛が求められ、ガイドラインが整備されても一定の開催制限の下、収容率が100%（声楽・合唱・吹奏楽除く）に許容される12月まで10ヶ月を要しており、その影響は金銭的な損害以上に、アーティストの活動継続に甚大な被害をもたらしている。

日本クラシック音楽事業協会が文化芸術推進フォーラムの委託により集計したクラシック音楽公演の被害概要（2020年1月～12月の対前年比）は、公演回数で42%減少、観客動員数で70%減少、売り上げで52%減少となっている。コンサートが少しずつではあるが開催されてきても、大人数が集まるイベントとしてリスクがあるとレッテルを貼られてしまった以上、従来の観客が戻ってくるまでは相当の時間がかかる事が見て取れるのではないだろうか。

コロナ禍において文化庁や経産省ではアーティストや芸術団体への支援事業として様々な対策が打ち出され、多くのアーティストや芸術団体が、無観客公演からリモート活動、映像配信等の活動を現在でも実施している。ホールのキャパシティを超える観客を集めたびわ湖ホールのオペラから、リモートによるオンラインでのオーケストラ配信等は多くの注目を集めた。これらの活動はコロナ禍がもたらした副産物ではあるが、ウィズコロナ時代のクラシックコンサートはどのようなものになっているのであろうか。クラシック音楽は生身の実演家による一期一会のパフォーマンスが魅力である。音響機材を介さずに、コンサートホールの純粋な響きを感じ取っていただく価値観の中で、映像配信をどう活用できるかがポイントだ。業界内の多くは、映像配信はライブの魅力を伝える手段としては成立するが、ライブそのものの在り方は決して変わらないだろうとの意見が根強い。ライブとは違った視点を活かして手間と費用をかけなければ、映像の魅力は活かせないだろう。しかし、どれほどの手間をかけてもホールで体験する響きを映像配信で再現する事は不可能だ。ライブの実演と映像配信とを効果的に連携させた相乗効果を期待したいところだ。

しかし、映像配信はライブでは体験できないバーチャルを活用した様々な魅力を秘めている。コロナ禍において密が否定される中、動物園や水族館、遊園地等のアミューズメント施設ではリモートによる映像配信を活用したバーチャルな体験が好評を博し、一部の文化施設でも実験的な試みがなされたようだ。それらをアウトリーチやワークショップ等の普及的な活動に活かす事は出来ないだろうか。もちろん費用の問題をクリアしなければならないが。

「おんかつ」におけるアウトリーチは、アーティストがホールから地域に出て行き、アートの魅力を伝える活動だ。コンセプトは三つの「小」、つまり短時間、少人数、狭空間である。これらのコンセプトは過去の様々な取り組みから導き出されたものではあるが、多くの人々に対して一定に届けてゆく事には課題が残る。学校等に対してはクラス単位でのアウトリーチを推奨しているが、学校側は均等を求めてくる。現状の対策では、とにかくアウトリーチの回数を増やす事を主眼とした長期的な取り組みで、その均等を保つように工夫等をしているが、映像配信を効果的に活用すれば、これらの課題もクリアになると思う。又、アウトリーチのプログラム作りは、楽器の特性やアーティストの個性、考え方等により様々な手法により音楽へのアプローチがなされている。それらのプログラムは鑑賞型、体験型、参加型、思考型等に分類出来るが、アイデア次第ではこれらを総合的に織り交ぜた複合的なアウトリーチも可能ではないか。参加者のみが体験できるプログラムと同等か、むしろそれ以上のバーチャルな体験を作り出して多くの参加者に届ける事も可能になるのではないだろうか。

クラシック公演の醍醐味は良質なホールの響きによって得られるものだが、アウトリーチの会場はコ

ンサートホールと同様の設備や環境が整ってはいない。つまりコンサートとアウトリーチはお互いが連携している事が重要であって、そもそも目的が違うのだからコンサートの価値観をアウトリーチの現場に求める必要はないとも言える。ではアウトリーチの目的はどうだろうか。対象者がコンサートに来てくれる事、アートに興味を持つ事、アートを通じた新たな発見がある事、ホールの活動に理解を示す事等、様々な成果が期待されているが、これらの目的は映像配信を活用する事によって、その成果はより大きな形になって戻ってくる事は多いに期待出来るものと思う。

「コロナ禍のもたらしたもの」とはあまり言いたくはないが、ライブ活動の価値観と、通信機器の進歩、それらを場面場面に応じて活用する事が、次の時代への重要な橋渡しではないだろうか。

2020年は新型コロナウイルスの影響をまともに被る年となった。まさしく未曾有の一年で、それは今も続いている。昨年の今頃は初めての緊急事態宣言が発令され、感染予防の仕方もよくわからないまま、ただただ不安な日々を過ごしていた。ウィルスに対する情報量の少なさから不安が恐怖に変わり、社会活動が停止した。全てのコンサートは中止や延期になり、音楽大学も登校禁止に。街の練習スタジオも閉鎖になり「音楽作り」が全て止まってしまった。

劇場の音響や照明スタッフの離職が一時期話題になったが、演奏活動で生計を立てている音楽家たちにとってもコンサート“0”は収入“0”を意味する。日々減っていく預金通帳の残高とにらめっこしながら、「あとどれだけ持ちこたえられるか」胃に穴があく思いをした演奏家が全国にどれだけいたのだろうか。先の見通しが立たないために楽器を練習する気持ちにもなれず、コンビニや出前配達のアパートを始めた人や、思い切って演奏家をやめて転職してしまった人もいた。多くの演奏家たちは幼少の頃から楽器を習い始め、プロになるために勉強し、技を磨く音楽漬けの学生生活を過ごし、卒業後はプロとして練習とコンサートを延々と繰り返す「音楽人生」を送ってきた。そんな演奏家たちにとって、コンサートが無い、演奏活動ができないというのは、人生を全否定されるに等しい事態だったといっても過言ではない。

そんな中、政府や自治体による様々な経済支援策が提供されたが、芸術分野の支援に手が届くのは本当に遅かった。社会インフラを維持するのが最優先であることは当然だが、経済的に余力のある人たちに旅行や外食が積極的に推奨されたのに比し、文化芸術イベントへのサポートはなかなか始まらなかった。そんな“文化芸術は後回し”感が否めない中、改めて今の社会でホールや劇場に行き音楽を聴いたり、演劇や舞踊を鑑賞するといった行為の価値（意味）とは何なのかということを考えさせられた。

芸術（文化）とは「人間が人間らしく生きるために必要なもの」という言葉がある。別に目新しいものではなく、すでに心理学者や脳科学の研究者などがいっている言葉なのだが、今回改めてこの言葉の持つ意味に得心がいった。「人間らしい」とはつまり、人間にしか備わっていない能力を活かすということだが、いくつかある人間ならではの能力の中に「感動する力」と「想像する力」がある。動物にも恐怖や怒り（喜びや悲しみも）を感じる力があるが、人間の持っている「感動する力」とはそういう本能的なレベルではなく、もっと高度で複雑なレベルでの話である。その最も人間らしい「感動する力」が、近年あまり活用されていないのではないか。

まだ学生の頃、ラジオのインタビュー番組で戦後初の女性国会議員を務められた加藤シヅエさんの話を聞く機会があった。その中で加藤さんが若さの秘訣として「1日10回感動する」とおっしゃっていた。「たった10回でいいの？」と思って実際にやってみたのだが、これが意外に難しく、10回に達することは一度もなかった。なぜこんなに感動できないのかと考えてみて、無意識のうちに自分を「感じさせない」ようにしていることに気が付いた。たくさん感動するには心を開き、受容体であるそのやわらかな部分を解放していなければならないのだが、日々の生活の中には見たくない、聞きたくない、感じたくないものが溢れている。道端に咲くタンポポを愛でようとする、脇に落ちているたばこの吸い殻が目に入ってくる。鳥の鳴き声や風の音に耳を澄ませようすると、車のエンジン音や近くの店のBGMが飛び込んでくる。「嫌なもの」をシャットアウトして心に触れないようにするために、知らず知らずのうちに私たちは「鈍感」になっている。息をするのも忘れるほど美しいものに見惚れたり、窓を開けて叫びたくなるほどの喜びを感じたり、胸が張り裂けるような哀しみをじっと堪えたり…こんな感動を味わえるからこそ「人間らしい」のであり、こんな感動を味わう度に「生きていること」を実感するのではないか。

ホールや劇場で聴いたり観たりできる音楽や演劇といった芸術作品は、これら「感動体験」の塊であ

る。日常生活で心が鈍感になってしまっているからこそ、日常とは違う空間であるホールや劇場に足を運び、様々な感情を味わうことで「人間らしい心」を取り戻す。それを可能にすることこそが舞台芸術に求められている要諦であり、そのために「感動の時間・体験」を提供する表現者としてのアーティストと、「感動体験」を提供する場としてのホールや劇場が、現代社会にとっていかに必要不可欠な存在であるかを、多くの人々がコロナ禍にあって自己防衛のために心を閉ざさざるを得なくなってしまう今、改めて、強く訴えかける必要があると思っている。

さて、前置きが長くなったが、おんかつ事業を組み立てる上で様々な目標・ビジョンが必要になる。それは大きく分けて以下の3つに当てはまる：

- ① 市（町村）のビジョン
- ② ホールのビジョン
- ③ コンサートのビジョン

①は、街作りに関するビジョンで、いわば事業の最終ゴール地点となる（おそらく一年や二年で簡単に到達できるものではなく、常にゴールとして思い描き続けるもの）。②は、①のビジョン達成のために市民のための文化施設であるホールがどのような役割を担うべきかを明確にするもの。そして、③はそのホールの役割の一つとして実施するコンサート（を含む事業全体）で何を目指すか、ということである。今年度担当させていただいた山形県長井市での事業では、①と③のビジョンは非常に明確であり、アーティスト（地元出身ということもあり）も含めた事業関係者の中でもよく共有されていた。残念ながら最後まで明確なビジョンが見えてこなかったのは、②のホールのビジョン—市民のためにどのような存在であるべきか、どのような役割を果たすべきか—だった。リニューアルしたことは大々的にアピールできていたが、リニューアルしてホールを再開した「これから」の部分がなかなか見えてこなかった。担当の梅津さんのお立場（ホール事務所にデスクがあるのではなく、ホールも含めた市の文化・スポーツ全体を統括するお立場）が、あと一歩ホールとの距離感を縮めきれなかったこともあったかもしれない。また、運営体制が改修工事のために指定管理から直営になっていたが、その工事も無事完成し、また次年度からは指定管理に戻るという過渡期であったため、ホールの運営に関する長期的なビジョンを描きにくかったことも事実であろう。アクティビティも含め、コロナ禍で大変な時期であったにもかかわらず多くの方々に梅津碧さんの歌声を堪能していただけただけに、これが一度きりの事業になってしまわないことを祈るばかりである。

ホールの管理が指定管理会社になっても、ホールはあくまでも市の施設・市民のための施設であることに変わりはない。市民が人間らしく心豊かに暮らせるように、たくさんの「心を動かされる」体験が提供できるホールであり続けて欲しいと願っている。

2020年は未知の領域への挑戦が目白押しでした。みなさんにおかれてもきっとそうでしょう。止まるにしても進むにしても判断の基準がなく、迷うことばかり。

おんかつにおいては事始めとなる全体研修会の開催を断念することとなり、下見とは別にフォローアップのための個別研修が行われました。私が担当した三市町のうち、二市町は研修後に事業の延期を決定されましたが、あの時、事業を進めるに足る具体策をお伝えできていたかと言うと、今思うに……いま一歩だったのではないかと。

今年度の実施を経て感じていることに話を移します。学校の受け入れが厳しい状況の中、私が担当したまちでは「この状況だからこそ特別な時間を子どもたちに過ごしてもらいたい」と学校から有難いお声をいただき、アクティビティ先についてはすんなりと決まりました。ただこの有難い声の真意は私が思っていたものよりも深いものでした。

学校が休みになり、授業が始まっても時間差登校であったり、運動会や学芸会はもちろん、全校集会など日常の行事すらも実施できない学校運営の状況は先生方にとって心を締め付けられる非常事態でした。子どもたち同士が共に活動することができず、一緒に頑張ったり思い合ったりする機会が無いことが未来にどのような影響を及ぼしてしまうのか。目の前の子どもたちにもたらされてしまうであろう影響を憂いていらっしゃる先生の様子を目の当たりにしました。そして意を決して「全校生徒が集まる時間を作っていただけではないでしょうか」と先生から発せられた言葉には、子どもたちを想う気持ちに満ちていました。

学校でアウトリーチを行うにあたり、ひとクラスのみではなく全校生徒を対象に実施してほしいという学校からの声を多くいただきます。おんかつでは少ない人数、狭い空間、短い時間という「三つの小」をコンセプトに密な環境を整え、その場にいる人たち同士が伝え合い受け止め合えるような関係性を築けるようなプログラムを作っています。ですのでこの全校生徒を対象のご要望に応じることは基本的にはありません。

しかし今、おんかつが前提としている密な環境を整えることは許されません。物理的に距離を保ち表情を覆ってしまうマスクをし、今までの価値観とは真逆の環境での実施となります。とは言うものの、アーティストと子どもたちとの関係性にも距離感仕方なしになるかと言えばそうではなく、以前にも増して温かなつながりが望まれています。

おんかつの大前提が狂わされることを嘆くのは癪なので、これを逆手に全校生徒対象にした一曲だけのミニコンサートをアーティストに協力してもらいました。久しぶりに体育館に集まる生徒のみなさんのごちなさ、私自身も経験したことのないアーティストと生徒との物理的な距離。微妙な空気が漂う中、曲目とリンクした衣装（この一曲のために着替えてくれました！）をまとめて現れたアーティストの工夫と気概に、まだまだできることあるじゃないか、と尻を叩かれた気がしました。

できなくなったことは多々ありますが、私たちにはそれを補える知恵があります。子どもたちとの距離が遠くなったなら、もっと手を伸ばせば良い。それでも届かないのであれば子どもたちにも手を伸ばしてもらえば良い。互いに歩み寄れば一步の距離も半歩ずつ。衣装然り、子どもたちに向ける視線然り、お話の内容はもとよりその声のトーンやスピードなどなど、磨けるものは無数にあります。これからのプログラム作りには、子どもたちから発せられているものをさらに敏感に受け止め、今まで以上に互いが求め合えるものを開発していくべきと感じています。

2020年度のアウトリーチの現場を経験したことでおんかつで目指しているものを再認識し、現状で求められる環境下でそれを実現するため、新たな引き出しの必要性を実感しています。この実感をもって冒頭での個別研修に臨んでいたならば、おそらく今一步の感触は半歩くらいに抑えられたかと。2021年も挑戦の年になりそうですが、少しワクワクしています。

コロナ禍におけるおんかつの新たな挑戦

令和2年度がこのような1年になるとは誰が想像できたでしょうか。今もなお、全世界に深刻な影響を与えている新型コロナウイルス感染症は、芸術文化の世界に対しても、公演活動のみならず芸術文化組織自体の存続に関わる厳しい状況をもたらした。度重なる公演中止や無観客公演等による財政的打撃はもちろんのこと、なによりも音楽活動が思うように実施出来ないという状況は、実演団体にも聴衆にとっても大きな心の痛みをともなった。

そのような中で、今年度のおんかつは、これまでになかった様々な壁が立ちはだかる中での実施となった。その苦難や課題については、おそらく他のコーディネーターの方々も述べておられることであろう。私が個人的に一番困難に感じたのは、おんかつがこれまで大切にしてきた近い距離での演奏や、密なコミュニケーションが不可能となってしまったことである。つまり、アウトリーチ活動におけるメリットが、コロナ禍において逆にデメリットとなる状況に陥ったのである。

私が担当したおんかつでは、当初は実施できるかどうかとも危ぶまれ、アクティビティ先の決定までに二転三転したが、無事に3月上旬の本番を終えることができた。今回指名されたアーティストはソプラノ歌手であったが、クラシック音楽公演運営推進協議会「クラシック音楽公演における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」をはじめとするさまざまな飛沫感染リスクの検証結果が示している通り、声楽は他の楽器よりも飛沫の危険を多く伴うため、通常よりもさらに感染対策を講じる必要があった。アーティストからのアクティビティへの想い（自身の体に触れてもらって発声の仕組みを伝えたい、参加者とともに歌を大きな声で歌いたい…など）を実現できない状況下で、おんかつらしいおんかつが果たしてできるのだろうか、という不安があった。

幸い、今回のアクティビティ先であった小学校と作業所の受け入れ担当の方々、おんかつの目的を良く理解してくださり、感染症対策にも大変協力的であった。当初、小学校からは体育館で3クラス合同で実施してほしいという希望がでていたところ、1クラスずつ音楽室での実施（計3回）へと対応してくださり、作業所においては、できるだけ広いスペースを確保するために大きな棚等を全て移動し、おんかつを実施しやすいレイアウトにしてくださった。実施にあたってアーティストと小学生の間にアクリル板を設置したり、アーティストと対象者の距離を十分取るといった環境は全て整えられ、最終的にはいかに物理的な隔たりを乗り越えて音楽を共有するかが大きな課題となった。

アーティストと児童の間に設置されたアクリル板は、始めこそ双方を分断する存在に感じられたが、演奏と対話が進むにつれ、不思議とその違和感が減ってきた。途中、代表の児童に対してアクリル板越しの発声体験を実施したが、アーティストによる的確でユーモアあふれるアドバイスにより、児童の声の変化が実感でき、アクティビティのテーマであった「可能性は無限大」につながる成果が得られた。アーティストの圧倒的な歌声とメッセージ性の強いトークが、子どものたちとの心の距離を縮めた結果ではないだろうか。その証拠に、マスク越しであっても、子どもたちの目の輝きは、これまでの見てきたおんかつと変わらぬものであった。

作業所でのアクティビティは、アーティストと対象者の距離を確保できたことからアクリル板は使用せず実施した。演奏が始まるや否や一体感が生まれ、文字通り交流プログラムとなった。コロナ禍において芸術鑑賞の機会が減っているなかで、対象者の方々も生の音楽やリアルな心の交流を欲していたのではないだろうか、全身から喜びが溢れているのを感じた。従来のおんかつとは異なる状況での実施となり、アーティストも実施団体も苦勞する場面が多かったが、今回のアクティビティを通じて、おんかつの意義を改めて感じた。

昨今は、オンライン配信型のコンサート等が増え、感染リスクがなく気軽に芸術文化に触れることが

できるようになり、鑑賞機会の増加、遠隔からの参加といった点において大いにメリットがうまれた。また実務的な面でも、ホール担当者やアーティストとの打ち合わせをZoomで行い、それぞれが遠方かつスケジュール調整が難しいなかでミーティングをできたことは、オンライン化による恩恵といえる。今後は、アーティストとアクティビティ対象者との事前交流等にもオンラインを活用できるのではと考えられる。令和2年度はさまざまな面で模索しながらの実施ではあったが、今後も続くコロナ禍において、新たな可能性やおんかつの価値を考えるきっかけとなり、確実に前進したといえる。

おんかつの価値を捉え直す

高性能なスピーカーやヘッドフォンを使用してのDVD鑑賞やオンラインコンサートでは得られないもの—それは演奏者と同じ空間にいるからこそ体感できる空気感や、体全体で直接感じる振動や音圧ではないだろうか。このことは、今回のアウトリーチの現場で強く感じた。また、おんかつ特有の価値として付け加えるならば、「人と人との出会い」ということが挙げられる。アーティストが或る地域に一定期間滞在し、その地域や人々の暮らしを知る、そして4回のアクティビティや地元の人々との出会いを通じてアーティストの中で化学反応が起こり、ホール公演で聴衆（＝地域住民）にフィードバックする。この一連の流れは、おんかつでしか創り出すことのできないものである。

今後も私たちの生活のあらゆる場面でオンライン化が加速することが確実で、オンラインによる鑑賞機会の増加や遠隔による交流機会といったメリットは活用すべきである。しかしながら、やはり人と人とのリアルな出会いの場における音楽は、何にも代え難いものである。そのことを社会に伝えていく意味でも、アーティストやホールの担当者の方々をはじめとするおんかつに関わる全ての人が、おんかつがもたらす価値、おんかつだからこそ産みだせる価値を再考し、共通認識をもって進めていくことが肝要であると考えられる。

おんかつでは、ホールとアーティストがどんな目的や視点を持って、何を届けようとしているのか、アクティビティとホール公演をどうつなげようとしているのかなど、事業担当者がイメージするアクティビティ対象者に「伝えたいこと」「届けたいこと」を、アーティストが理解して自身のプログラムに落とし込み、その構築したプログラムをどのような手段・手法を持って最終的に届けられるかが事業の成否に影響する。

おんかつに限らず仕事やプライベートにおいても、物事を進める上でコミュニケーションは重要な要素の一つである。今年度は全体研修会で一堂に会する機会もなく、担当者に実際にお会いするのは公演2ヶ月前の現地見が最初ということが、事業を進めるにあたりどこまで打ち合わせができるのか大きな不安として重くのしかかっていた。実際に顔を合わせれば会議や打ち合わせで少し協道にそれた話やちょっとした雑談もあり、そこからアイデアが生まれる要因になったりするものだが、リモート会議を利用はしたものの画面越しでのやりとりはどうしても淡白になりがちで、踏み込めず、引き出せずで私自身の経験不足も痛感。そのような状況でアーティストと現地入りしてから特に重要視したのは、アーティストと担当者・スタッフが一つの「チーム」になるための環境づくりである。担当者としてはアーティストに直接意見を述べたり要求を伝えることを遠慮してしまうことがあるため、担当者や我々スタッフも含めて、考えていること、感じていることをお互いに伝える機会、いわゆるコミュニケーションの機会を意識的に設けた。

今年度担当した奥州市では、担当者が目指していたのは子どもたちのみならず先生（大人）にも響くプログラム。コロナ禍により子供たちとの距離を保つなどの制約がある中で使用したモニターやパソコン操作も含めて、さまざまな面で率先してサポートしていただいたホールの方々の存在は、プログラムを届ける一役を担う大きなものでもあった。実際に、現地入りした段階では漠然としてプログラムの完成イメージが見えづらかったものが、ランスルーから各アクティビティ後に担当者はじめスタッフみんな意見を出し合う中でプログラムの方向性が定まっていった。子どもたちがご家族と共にホール公演に足を運んでくれたことからプログラムの効果が見受けられる。そこに携わる人々が協働する「チーム」が出来上がったことによる成果と言えるのかもしれない。

子どもたちの様子を後ろから観察していると、演奏に集中しているのか、気もそぞろなのかよくわかる。どんな場面で子どもたちの心が惹きつけられたのか、はたまた離れてしまったのかは演奏している本人には判断しづらいこともあるだろう。どうすれば子どもたちとアーティストの関係性を良いものにすることができるのか、より良いプログラムとするためにはどうしたら良いのか、観察から気づいたことからアーティストに伝えるべきことを取捨選択しつつ、耳打ちしてあげるだけでアーティストにとってもプログラム構築のヒントになるだろう。

今回は子どもに重点を置いたアクティビティであるものの、プログラム実施後の先生の表情を見ると子どもたちだけではなく先生にも効果が表れているようで、地域や対象が変わっても通用するものになると感じさせるものだった。先生に与えた効果は先生自身の体験・経験としても残り、今後継続していく上で非常に効果的なものとなるのではないだろうか。

コミュニケーションを重ねることで、アーティストがイメージしているものにスタッフみんなが工夫して近づけていこうとすることで生じる連帯感は、アーティスト本人にも伝わる。提案に対して「できない」ではなく「この形ならできる」と代替案を出していただくだけで共に作り上げている感覚になり「チーム感」が生まれる。担当者が地域とアーティストを結ぶ役割として、相談や要求を気兼ねなく話すことができる「チーム」として事業が実施できるよう、アクティビティ先やアーティストとのコミュニケーションを深めながら取り組んでいただくことを期待する。

おんかつ登録アーティストは、何を大事にしたいのか？

おんかつは、公共ホールとアーティストが協力しながらアクティビティやコンサートを作り上げます。その企画、制作、実施の過程でスタッフのみなさんはアーティストと様々なやりとりをしているわけですが、ともすると、事務的に必要な連絡調整に終始してしまい、お互いに何を大事に考えて、どのようなおんかつにしたいのか、本音で語り合う機会や時間があまり取れていないということはないでしょうか。

そこで今回の私の視察では、おんかつやおんかつ支援の登録アーティストが、どのような思いでこの活動に取り組んでいるのか、どんなことに喜び、戸惑い、やりがいを感じるのか、そして、何を大事にしたいと思っているのかを聞いてみました。当初は複数の実施現場で、複数のアーティストにインタビューをする予定でしたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大の影響もあり、2020年12月11日と12日、静岡県菊川市内でのヴァイオリニストの北島佳奈さんの活動を視察しました。

11日は小学校3年生と6年生を対象としたアクティビティで、北島さんはバラエティに富んだ数々の曲を、彼女自身の子どもの頃の思い出話を交えながら紹介。美しく、洗練としたヴァイオリンの音色だけでなく、北島さんの少女時代のエピソードに心を開いていることは、子どもたちの表情からも明らかでした。翌日12日、菊川文化会館アエルでの「わたしの街におんがくのたねを」と題したコンサートでは、関西弁交じりの楽しいトークや、会場のお客様に足拍子での参加や、北島さん自身が撮影した菊川市内の風景写真を投影しながらの演奏などで、アーティストと聴衆がともに音楽を心から楽しみました。

ヴァイオリニスト・北島佳奈さんにとってのおんかつ

コンサートの前日、小学校でのアクティビティのあと、ホールでのリハーサルの前に北島さんに、おんかつの取組やヴァイオリニストとしての活動について話を伺いました。まず、おんかつの登録アーティストのオーディションを受けたきっかけについて聞いたところ、北島さんは学生の頃からおんかつアーティストの制度を知っていて、オーディションを受けたいと思っていたそうです。実は、彼女が子どもの頃、生まれ育った和歌山のホールに実際に足を運んだヴァイオリニストの大森潤子さんのコンサートが、地域創造のおんかつのプログラムで実施されていたことを大人になってから知ったそうです。大森さんがやさしくわかりやすいトークを交えながらヴァイオリンを聴かせてくれたことを今でも覚えていて「あんなことができるようになりたいとずっと思い続けてきたんです」と北島さん。

「子どもの頃からヴァイオリンを弾き続けてこられたのは、周囲の人々のおかげ。だから、音楽を通じて人と出会い、自分と出会うことが音楽との出会いにつながることで、心にパワーを与えることができれば」。おんかつは、チケットを買ってコンサートに来てくださる方々とは違う出会いのチャンス。だからこそ価値があると彼女は言います。北島さんにとって、同じヴァイオリンの演奏でも、リサイタルとアウトリーチはまったく違う緊張感があり、両方の活動が大事だと言います。主催者によってはホールでのコンサートがなくてアウトリーチだけの取組で招かれる場合もありますが、「それもいいけれども、ホールでのコンサートがあることで、地域との関わり方が全然違うんです。ホールのスタッフの方と一緒にコンサートを作り上げる、その集大成があることで、地域との密接な関係が生まれるんです」。

楽器体験や共演に慎重になる理由

今まで、おんかつやおんかつ支援の取組の中で、何か困ったことがあったか聞いてみました。北島さんは少し考えてから、時々リクエストされる子どもたちや地元の演奏家との共演や楽器の体験は、簡単にはできないと言います。理由のひとつは、アクティビティで与えられている時間には限りがあって、

例えば共演をすることになると、限られた時間の中でプログラムの構成全体を考え直さなければならない。楽器の体験を入れるとなると、なるべく子どもたちに公平なチャンスを与えたくなるし、そうになると、自分自身が伝えたいこと、やりたいことができなくなってしまうからです。

もうひとつの理由は、音楽に対する思いを大事にしたいがゆえに、その曲を軽く扱うことができないからだと言います。例えば、子どもたちが歌う校歌で共演できないかとお願ひされたとしても、子どもたちにとっての校歌に対する思いを彼女は共有しているわけではないので、共演することは簡単にはできないと言います。その姿勢は、プロの音楽家としての音楽に対する誠実さや敬意の表れだと私は感じました。

コロナ禍で「私に何ができるのか」を問い直す

北島さんにとって、10年前の東日本大震災と、現在のコロナ禍は「私に何ができるのか」を問い直すきっかけになっていると言います。「私にできることはヴァイオリンを弾くこと、堅実に音楽と向き合うこと。今は、いろんな不安の中で、ウイルスに感染しないように子どもとの距離や、目に見えることしか配慮していないんですが、まだ続くかもしれないこの状況で、私に何ができるのか。毎日考えています」。

公共ホールのスタッフの皆さんは、このコロナ禍で「私に何ができるのか」、そして「ホールに何ができるのか」を考えていらっしゃるでしょうか。おんかつを通じて、ぜひアーティストと一緒に、その問いに向き合い続けてほしいと思います。

